## 3. 第 6 回研究会

日時：2004 年 11 月 27 日～28 日
会場：（財）日本地図センター

**第 6 回研究会は、(財) 日本地図センターにて開催された。研究会では、報告者が持参された、外邦図や空中写真などを閲覧する機会も得た。**

# 極浅海域の地形特性と上陸作戦

砂村継夫（大阪大名誉教授）

## Ⅰ．はじめに

上陸用舟艇による侵攻作戦は砂浜海岸をターゲットにして行われる。これを遂行する上で考慮すべき最重要事項は、侵攻時の波浪条件と上陸地点における極浅海域（水深数メートル以浅）の地形特性であろう。荒天時の作戦が困難であることは明らかであるが、静穏時といえども地形特性が作戦の成否をわける場合もある。そこで、まず砂浜海岸の極浅海域の地形について概観し、次に Bascom （1964）の記載に基づき、第 2 次大戦末期に米軍が企てた片貝上陸作戦について述べる。

## Ⅱ．極浅海域の地形特性

荒天時の高波浪によって砂浜海岸は侵食され汀線（陸地と海面との境界線）は後退する。これは、高波浪襲来前にあった汀線付近の砂が浅海域に運搬された結果である。運搬されてきた砂は海底面に撒き散らされるのではなく、ある場所に塊となって堆積し、海岸線とほぼ平行に連続する「高まり」を形成する。この高まり（砂の集合体）はバー（沿岸砂州あるいは沿岸底州）とよばれる。バーが形成される水深は、襲来波浪の特性（波高や周期）や継続時間、海岸を構成する砂の粒度、浅海域の平均的な海底勾配などによって決まる。

高波浪が終息して波浪が静穏になるにつれて、バーは、ほぼその形態をたもちつつ徐々に岸方向に移動する。最終的にはバーは海岸に付着して、その頂部が海面上に現われる。その後、波がバーを構成していた砂を海岸に押し上げ、バームとよばれる堆積地形を形成する。この時点で汀線が大きく前進する。バーム形成とともに汀線周辺の地形勾配は、侵食時の勾配に比べてかなり大きくなる。この段階で砂浜は高波浪襲来前の状態にほぼ戻る。

砂浜海岸は、高波浪の襲来とその後の静穏波浪の出現という周期的な変化に呼応して、上述したような地形変化を繰り返している。特に、バーが陸方向に移動するステージにおいては、バーの頂部水深が浅くなることが原因で波が強制的に砕けて波のエネルギーの損失が生じたり、離岸流とよばれる沖向きの強い流れが出現したりする。その結果、バーの平面形態のみならず汀線形状も変化する。このような地形変化は、元来、汀線付近から運搬されてきた砂の貯蔵庫であるバーが岸方向に移動する途中で、波および流れに対する可動の障害物として働くためである（Sunamura, 1989）。

上述のバーは高波浪時に出現し、波浪が静穏になるにつれて岸方向に移動し、最終的には岸に乗り上げて消失するというような非定常的な地形である。このような地形が見られる領域のすぐ沖側には、多くの海岸で、定常的に発達しているバーが存在している。このバーも砂の集合体で、海岸線ほぼ平行に走っているが、その形成機構についてはまだ定説がない。この種のバーは、静穏時に船を用いて行われる深浅測量でとらえることができる。砂浜海岸は、定常的なバー（以下に、単にバーとよぶ）のある、なしによって、バー海浜、バーなし海浜に分類され、特に複数列のバーが発達する海岸を多段バー海浜とよんでいる。

図１は、わが国における定常的なバーの分布図である。この図は、茂木（1963）ならびに Takeda（2003）の成果を取りまとめたものである。日本海沿岸ではほとんどが多段バー海浜（挿図の B2, B3）で 1 段バー（B1）やバーなし海浜（NB）は少ない。一方、太平洋沿岸では、多段バー海浜はほとんどなく、わずかに 2 段バー海浜（B2）が鹿島海岸と九十九里海岸の二箇所に見られるだけで、他は1段バーかバーなし海浜である。一般に、急勾配の海岸（大粒径の砂で構成されていることが多い）ではバーは発達しにくいが、緩勾配のところでは（小粒径の砂の海岸）では多段バーの発達が顕著である。

## III 米軍による片貝上陸作戦

緩勾配の海岸ほど上陸作戦を敢行しやすいことは明

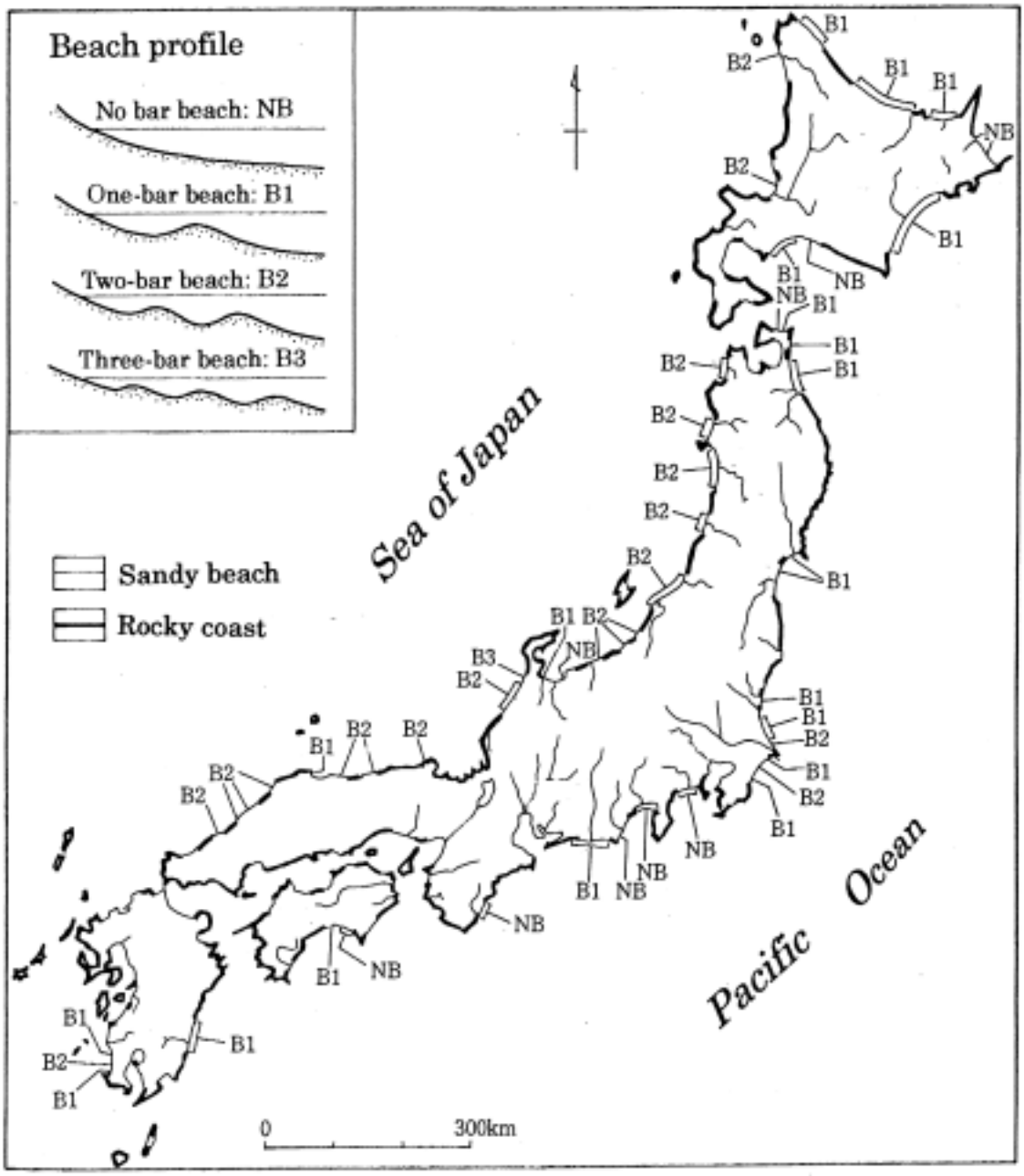


**図１　わが国のバー（沿岸砂州）の分布**

らかである。しかし、このような海岸ではバーが発達しており、すなわち海底に凹凸があり、そのため波や流れの場が複雑になっており作戦遂行上多くの困難と危険を伴う。そこで上陸地点における事前の浅海底地形調査が必要となるが、実際、このような調査を敵地で実施することはほとんど不可能に近いと思われる。

第二次大戦の末期、米軍はわが国への侵攻計画を Operation Olympic という暗号名でよび、上陸地点として九十九里海岸の片貝を選んでいた（Bascom, 1964）。片貝はこの海岸の中央部に位置し、片貝とその周辺は九十九里海岸の中でも最も緩い勾配（約 1/150）を持っている。ここの浅海域には、水深約 1.5 m と 2―3 m のところに頂部がある 2 段のバーが発達する。米軍は、入手した片貝沖の浅海底地形の縦断プロファイル（図 2、下）をもとに、このプロファイルに類似した地形要素をもつ海岸として Washington 州の Leadbetter Spit（図 2、上）を選出して、そこで上陸作戦の訓練を繰り返した。その結果、非常に静穏でない限り片貝での上陸作戦は

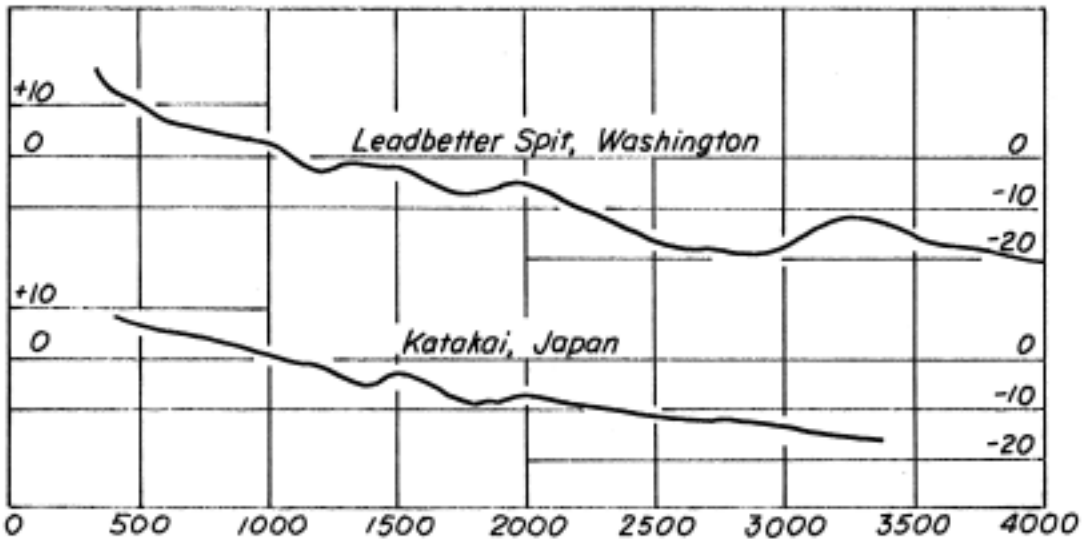


**図2　Leadbetter Spit と片貝における海底縦断面形（単位はフィート）。Bascom（1964）による。**

大惨事をもたらすであろうという結論に達した、とBascom (1964) は述べている。なお、Coox (2000) によれば、日本本土への侵攻作戦の全般的な暗号名はDownfall、九州に限定した場合が Olympic となっている。なぜ Bascom と Coox の中で、暗号名の記載に齟齬があるのかはわからないが、九州もターゲットになっていたことは明らかである。

図2に示されている片貝沖のプロファイルには、船による測量では不可能な非常に浅い領域から陸上部に及ぶ範囲の地形が描かれている。戦時中に米軍がこのような地形情報をどのようにして入手したのかという点に個人的には興味を引かれる。

## 文献


**茂木昭夫　1963. 日本の海浜型について. 地理学評論 36: 245－266.**

**Bascom, W. 1964. *Waves and beaches*. Garden City, New York: Anchor Books Doubleday & Company.**

**Coox, A. D. 2000. Needless fear: the compromise of U.S. plans to invade Japan in 1945. *Journal of Military History* 64: 411－438.**

**Sunamura, T. 1989. Sandy beach geomorphology elucidated by laboratory modeling. In *Applications in coastal modeling*, ed. V. C. Lakhan and A. S. Trenhaile, 159－213. Amsterdam: Elsevier.**

**Takeda, I. 2003. Height of the landward limit of backshore at Japanese beaches. *Journal of Coastal Research* 19:1082－1094.**

# 第二次世界大戦末期の内邦諸図について

清水靖夫（国士館大学・非）

第二次世界大戦末期の昭和 19･20（1944･45）年、参謀本部、作業は傘下の陸地測量部が、戦地の外邦図作製に躍起となっていた時、内邦図諸図はどのような状況に置かれていたか、残されている諸地図から状況を眺めてみたい。

往時の記録や作業状況を記したものは、ほとんど無く、戦後編集された『測量･地図百年史』上に僅かに記されているのみで、あとは、当時の「地図一覧図」上から読み取る以外、紙上に記録されているものは、現在のところ知られていない。なお外邦図という特定名称は、内邦図の対語として誕生している。

昭和 16（1941）年一般の人々への地形図類の販売が停止された。もっとも教育、土木等必要な向きには、許可証が有れば限定的に購入は可能であったようである。

国土地理院の図歴記録に欠落している地図群がある。いずれも当時陸地測量部の上部機関であった参謀本部作製の地図群である。直接戦闘用と記された地図群であったため、終戦後社会を憚り外邦地域の地図とともに刊行図でもなかったため、あえて外したとも考えられる。

昨年（2004）の研究会で「終戦前後の日本周辺の地形図」として一部発表提示させて頂いた内容は「集成二十万分一帝国図」、「集成五万分一地形図」、「陸海作戦用図」、「陸海編合図」などについてであった。いずれも終戦直前における、日本本土作戦用の地図類であり、以下は現在までの知見の記録である。欠落部分、記録等大方の御教示を賜りたいと願っている。

## ○集成五万分一地形図

本土作戦用地図、通称を「マルタ」（記号㋟）と呼んでいた。主として太平洋沿岸に作製されたからであった。地図の特定名称は「集成五万分一地形図」である。その内容は以下に示す通りである。

作製面数：不詳だが 168 面以上。

作製地域：津軽海峡から本州太平洋沿岸、瀬戸内海、九州沿岸。

作製年：昭和 20（1945）年製版。

作製者：参謀本部。

体裁：四六判、1 色刷、1 ㎞の距離方眼が描かれている。

原則として 5 万分 1 地形図 4 面を集成、20 万分 1 帝国図を基準に 5 万分 1 の 1･2･5･6 を 1 号、3･4･7･8 を 2 号、9･10･13･14 を 3 号、11･12･15･16 を 4 号とし、必要に応じて 5 万分 1 を 1 面～3 面を集成したものもある。

本図群は昭和 20 年製版と上述したが、集成された 5 万分 1 は使用目的から当時最新の測量年次の地図を集成したもので、軍事施設等名称がそのまま入っており、戦後の刊行図では名称等を消去してしまったので、記録としても価値が有ろう。参考に神奈川県相模原市付近を図 3 に示した。なお不思議な事に同地域に同じ体裁で同じ軍事極秘扱いの内容の異なる図が存在する事が判った。参考までに図示すると、昭和初期の版で、鉄道等に戦時改描がみられる。当時ほとんどの外邦図作製作業が民間の印刷業者に外注されていたので、この「マルタ」についても同じであり、地図によっては図郭外右下に印刷所のロゴマークが描かれており、地図の陸地測量部からの供給が適切でなかったのかもしれない。

また、戦後販売された地形図の中で主として太平洋岸に、昭和 19･20（1944･45）年に沿岸部の港湾施設等にあまり上手でない部分修正がみられる。昭和 22～24（1947～49）年の地図一覧図をベースにした「集成五万分一地形図」の作製地区一覧図中に、該当する修正図の位置を斜線で示してみた。この部分修正は「集成五万分一地形図」のためか、あるいは後述する「陸海作戦用図」のためあるいは、両方の為のものか、修正地域の分布には興味がもてる。「集成五万分一地形図」の秘扱いの区分は以下のリストの通りである。秘扱いの区分が示されていないものは、実見していない図である。

## ○集成二十万分一帝国図

樺太から九州までを「集成五万分一地形図」と同じ形で「集成二十万分一帝国図」が作製されていた。その内容は以下の通りである。

作製面数：34 面

作製地域：南樺太～九州、千島列島と南西諸島の島々は作製されていない。

作製年：昭和 20（1945）年製版。

作製者：参謀本部。

体裁：四六判ほか、1～3 色刷、1 ㎞の距離方眼が描かれているものと無いものとがある。

秘密の取り扱い基準はすべて「部外秘」であり、墨 1 色のほか等高線が緑、茶などがあり、湾入や港湾の沿岸には等深線が部分的に描かれている。帝国図（現今の地勢図の前身）2～5 面が集成されている。集成されている図幅名は以下の通りである。

**集成二十万分一帝国図**

（昭和 20 年製版　参謀本部　すべて部外秘）

| [号数] | [包含される図幅名] |
|---|---|
| 1～9 | （南樺太、北海道） |
| 10 | 尻屋崎　野辺地　函館　青森　渡島大島 |
| 11 | 野辺地　八戸　青森　弘前 |
| 12 | 盛岡　一関　秋田　新庄 |
| 13 | 石巻　仙台　福島 |
| 14 | 白河　水戸　日光　宇都宮 |
| 15 | 佐倉　大多喜　東京　横須賀 |
| 16 | 村上　新潟　相川　長岡 |
| 17 | 高田　長野 |
| 18 | 甲府　静岡 |
| 19 | 三宅島　御蔵島　御子元島 |
| 20 | 珠洲岬　輪島 |
| 21 | 富山　高山　七尾　金沢 |
| 22 | 飯田　豊橋　岐阜　名古屋 |
| 23 | 伊良湖岬　宇治山田　木本 |
| 24 | 宮津　京都及大阪　鳥取　姫路 |
| 25 | 和歌山　田辺　徳島　剣山 |
| 26 | 西郷　松江　大社 |
| 27 | 高梁　岡山及丸亀　浜田　広島 |
| 28 | 高知　窪川　松山　宇和島 |
| 29 | 見島　山口　小串 |
| 30 | 中津　大分　小倉　熊本 |
| 31 | 延岡　宮崎　八代　鹿児島 |
| 32 | 厳原　唐津　長崎　福江 |
| 33 | 野母崎　甑島　富江 |
| 34 | 開聞岳　屋久島　黒島 |

**集成五万分一地形図［マルタ㋟］**

（昭和 20 年製版参謀本部）

| [図名称] / [取扱] | [図名称] / [取扱] |
|---|---|
| 尻屋崎３号函館１号/－ | 京都及大阪１/－ |
| 尻屋崎４/－ | 〃２/－ |
| 函館１・３/－ | 〃３/－ |
| 〃２/－ | 〃４/秘 |
| 〃４/－ | 和歌山１/－ |
| 野辺地３/軍事極秘 | 〃２/－ |
| 〃４/－ | 〃３/－ |
| 青森１/軍事極秘 | 〃４/－ |
| 〃２/軍事極秘 | 田辺１/秘 |
| 〃３/軍事極秘 | 〃２/秘 |
| 〃４/軍事極秘 | 〃３/秘 |
| 八戸１/軍事秘密 | 〃４/ |
| 〃２/軍事秘密 | 姫路２/秘 |
| 〃３/軍事秘密 | 徳島１/－ |
| 〃４/秘 | 〃２/軍事極秘 |
| 盛岡１/秘 | 〃３/－ |
| 〃２/軍事秘密 | 〃４/－ |
| 〃３/秘 | 剣山１/軍事極秘 |
| 〃４/秘 | 〃３/秘 |
| 一関１/－ | 〃４/秘 |
| 〃２/－ | 岡山及丸亀１/－ |
| 〃３/－ | 〃２/－ |
| 〃４/－ | 〃３/－ |
| 石巻１・２/軍事秘密 | 〃４/－ |
| 〃３/軍事秘密 | 高知１/－ |
| 〃４/軍事秘密 | 〃２/秘 |
| 仙台１/－ | 〃３/秘 |
| 〃２/－ | 〃４/秘 |
| 福島１/秘 | 窪川３/秘 |
| 〃２/秘 | 広島１/－ |
| 白河１/秘 | 〃２/－ |
| 〃２/軍事秘密 | 〃３/－ |

**〃３/軍事秘密**
**〃４/軍事秘密**
**水戸１号/秘**
**〃２/軍事秘密**
**〃３/軍事秘密**
**〃４/－**
**佐倉１/－**
**〃２/－**
**〃３/軍事秘密**
**〃４/軍事極秘**
**大多喜３/軍事極秘**
**日光２/－**
**宇都宮１/－**
**〃２/秘**
**〃３/軍事秘密**
**〃４/－**
**東京１/秘**
**〃２/軍事極秘**
**〃３/軍事極秘**
**〃４/軍事極秘**
**横須賀１/軍事極秘**
**〃２/軍事極秘**
**〃３/－**
**〃４静岡２/軍事極秘**
**長野１/秘**
**〃２/秘**
**甲府１/軍事秘密**
**〃２/秘**
**〃３/秘**
**〃４/軍事秘密**
**静岡１/－**
**〃３/－**
**〃４/－**
**御子元島１/－**
**〃３/－**
**飯田４/－**
**豊橋１/秘**
**〃２/－**
**〃３/－**
**〃４/－**
**伊良湖岬１/－**
**〃４/－**
**松山１/－**
**〃２/秘**
**〃３/軍事極秘**
**〃４/軍事極秘**
**宇和島１/秘**
**〃２/軍事極秘**
**〃３/－**
**〃４/軍事極秘**
**山口３小串１/軍事極秘**
**〃　４〃　２/軍事極秘**
**中津１/軍事極秘**
**〃２号/秘**
**〃３/軍事極秘**
**〃４/秘**
**大分１/－**
**〃２/－**
**〃３/－**
**〃４/－**
**延岡１/秘**
**〃２/秘**
**〃３/－**
**〃４/－**
**宮崎３/軍事秘密**
**〃４/軍事秘密**
**小倉１/－**
**〃２/－**
**〃３/－**
**〃４/－**
**熊本１/秘**
**〃２/秘**
**〃３/－**
**〃４/秘**
**八代１/－**
**〃２/秘**
**〃３/－**
**〃４/秘**
**鹿児島１/軍事秘密**
**〃２/軍事秘密**
**〃３/軍事秘密**
**〃４/軍事秘密**
**〃３/秘**
**岐阜２/－**
**〃４/－**
**名古屋１/軍事秘密**
**〃２/－**
**〃３/秘**
**〃４/－**
**宇治山田１/軍事秘密**
**〃２/軍事秘密**
**〃３/秘**
**〃４/秘**
**木本３/秘**
**開聞岳１東/軍事秘密**
**〃１/軍事秘密**
**〃３/－**
**唐津１/軍事極秘**
**〃２/軍事極秘**
**唐津４長崎３/－**
**長崎１/軍事極秘**
**〃３・４/－**
**野母崎１/軍事極秘**

**○陸海作戦用図**

「陸海作戦用図」は、北海道から九州までの主として平滑な海岸にたいして作製された。国内戦にむけて、敵兵の上陸しやすい平滑な砂浜を含む沿岸一帯に作製されたようである。詳細な記録は未見であるが、以下の通りである。

作製面数：不詳。
取扱：陸軍　軍事秘密（戦地に限り極秘）
　　海軍　軍極秘（戦地に限り用済後焼却）
作製地域：太平洋岸、東シナ海沿岸。
作製年：昭和 20（1945）年作製。
作製者：参謀本部（陸軍）、軍令部（海軍）。
体裁：四六判、3 色刷、経緯度 1 分毎の方眼。35 度・41 度のメルカトル図法。

本図群は、陸軍は参謀本部と海軍は軍令部の名前で作製されており、調製者として陸軍は陸地測量部、海軍は水路部の名前になっている。陸地部分は 5 万分 1 地形図に薄い黄色の地色をかけ、水部は水深数字が描き込まれており、等深線も 5,10,20,200m が挿入されている。図郭外上部に「1.本図ハ陸図ヲ主用セル関係上、地名等ハ右読ナリ、但シ欄外記事ハ左読トス　2.海部ハ小尺度ノ海図ヲ拡大セルモノナルニ付航海用トシテハ不適当ナリ（原文旧漢字）」とあり、両部内特に陸地測量部主導で作られたようである。外注による作製のロゴはない。「集成五万分一地形図」通称マルタについては、『測量・地図百年史』に簡単な記載はあったが、本図群に関する記載は無く、『日本水路史』中にも全く触れられていない。図郭範囲等は以下に示す。

**陸海作戦用図**

〔昭和 20 年作製、参謀本部（陸軍）軍事秘密，軍令部（海軍）軍極秘〕

［整理番号］/［図名］/［経度］/［緯度］/［図形］

**北海道　1:50,000　昭和 20 年 4 月作製（35°基準）**

其ノ一/十勝附近/143°29′-144°/42°39′-57′/横長

其ノ二/湧洞附近/143°17′-40′/42°12′-39′/縦長

其ノ三/襟裳岬附近/143°04′-27′/41°45′-42°12′/〃

其ノ四/浜厚眞附近/141°38′-142°01′/42°24′-50′/〃

其ノ五/苫小牧附近/141°15′-29′/42°24′-50′/〃

**東北　1:50,000　昭和 20 年 4 月作製（41°基準）**

其ノ二/三澤附近/141°05′-30′/40°34′-41°/縦長

**関東　1:100,000　昭和 20 年 3 月作製（35°基準）**

其ノ二/千葉附近/141°08′-55′/34°52′-35°44′/縦長

**九州　1:50,000 昭和 20 年 3 月作製（35°基準）**

其ノ五/宮崎附近/131°18′14"-40′30"/31°49′-32°16′/縦長

其ノ六/油津附近/131°14′30"-35′48"/31°22′-49′/〃

其ノ八/鹿児島附近/130°29′-52′/31°26′-53′/〃

其ノ十/串木野附近/130°06′-29′/31°26′-53′/〃

## ○陸海編合図

千島列島から南西諸島まで、太平洋岸の全ての島嶼について、陸上部分を 5 万分 1 地形図で、海洋部分を小縮尺海図を拡大した海図で、島嶼の周辺をの海底の大要が判るように編集されたもの。

昭和 19 年 10 月の内邦地域地図整備目録中に大部分は収録されているが、色丹島、小笠原群島の各島嶼が記載されていない。これらは実際に存在するので、この地図目録完成後に作製されたものと思われる。島嶼の地形図は、海洋部分が大きな地図が多く、一覧するのに不便であるところから地形図数面を接合し、海洋部分を充当したもので、1 色刷で方眼は描かれていない。作製地域は以下に示す通りである。

**陸海編合図**

（1:50,000　昭和 19 年製版ほか　参謀本部軍事秘密）

［図名］　　［所属島嶼］

幌筵島其 1～5…占守島幌筵島東端　幌筵島南東部分　阿頼渡島幌筵島北部　幌筵島中部　幌筵島南西部

温禰古丹島…温禰古丹島　磨勘留島　帆掛岩　春牟古丹島

捨子古丹島…捨子古丹島　越渇磨島　知林古丹島　牟知列岩

羅處和島及宇志知島…羅處和島　宇志知島　雷公計島　松輪島　計吐夷島

新知島其 1・2…新知島北東部　新知島南西部

得撫島其 1～4…得撫島東端部　得撫島中北部武魯頓島知理保以南北島　得撫島南東部　得撫島南西端

擇捉島其 1～8…擇捉島北東から南西に 8 分割

國後島其 1～4…國後島北東から南西に 4 分割

色丹島……昭和 19 年の一覧図になし［国会図書館所蔵図あり］

多樂島及志發島…多樂島志發島ほか

伊豆七島…大島　利島　新島　神津島　三宅島　御蔵島　八丈島　青ヶ島　須美壽島　周辺小島

小笠原諸島…昭和 19 年の一覧図になし［個々の島嶼の地図あり］

大隅列島其 1～3…種子島北部　種子島南部　屋久島　口永良部島

奄美群島其 1～3…奄美大島東部吐口葛口刺諸島喜界島　大島西部加計呂麻島請島　硫黄鳥島　徳之島　與論島

沖縄群島其 1～5…沖縄本島東部　伊平屋諸島　沖縄本島中部　伊江島　沖縄本島南部　久米島慶良間列島

南大東島…北大東島　南大東島　沖大東島

先島群島其 1～3…宮古島　伊良部島　魚釣島　石垣島　多良間島　西表島　與那國島

## ○兵用集成図

戦場となる可能性のある島嶼の一覧の為、千島列島、小笠原群島の島々の 5 万分 1 を 10 万分 1 に縮小集成したもの。沖縄の島々については、さらに 20 万分 1 を集成している。この集成図については以下に示した。

**集成図**

**（昭和 19 年製版ほか　参謀本部軍事秘密）**

| [地域] | [縮尺] | |
|---|---|---|
| 千島列島北部 | 1:100,000 | |
| 千島列島中部 | 1:100,000 | |
| 千島列島南部 | 1:100,000 | |
| 小笠原群島 | 1:50,000 | |
| 南西諸島兵用地誌資料図其ノ一 | | 全体図 1:1,000,000 |
| 南西諸島兵用地誌資料図其ノ二 | | 各島嶼 1:200,000 |

はじめに記したが、今回紹介した諸図は、外邦図と同じくわが国の地図史のなかで従来記されていなかった地図群であった。仮に負の遺産的な要素を含んでいたとしても、直接触れなかったが、歴史の流れの中で、また技術史のなかで大きな役割を果たし、戦後の発展の萌芽も見る事ができよう。なんとか全貌をつかみたいものである。

**図 1　本土作戦用地図、通称「マルタ」集成五万分一地形図　集成二十万分一帝国図作製範囲**
**※左上から右下への斜線は昭和 19・20（1944・45）年部分修正が行なわれた図幅。**

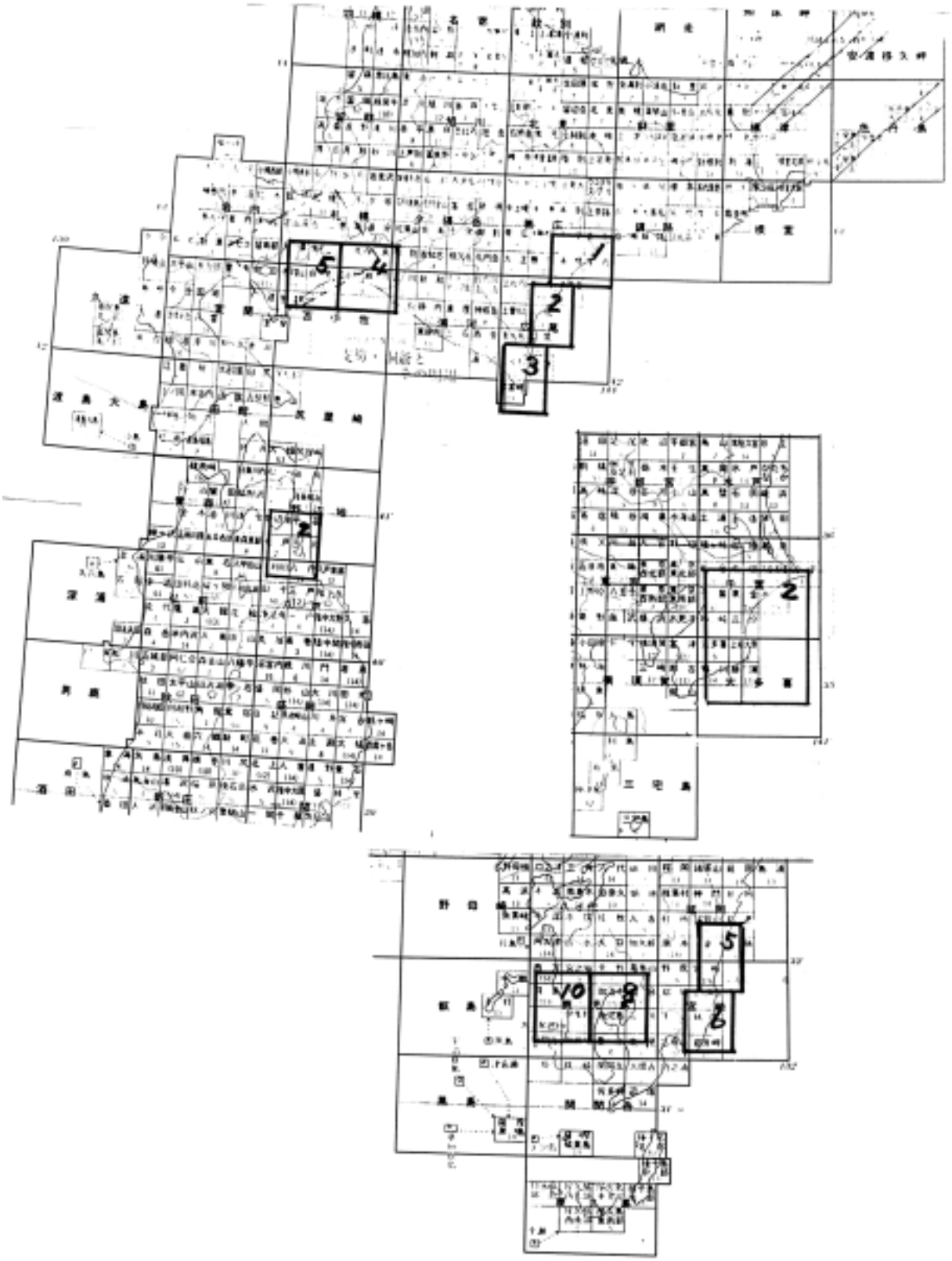

**図 2　陸海作戦用図作製位置の例**

図 3-1　集成五万分一地形図東京 4 号
※昭和 20 年製版（右上部分：八王子に相当）。軍事施設の入っているもの。原図を 50%縮小。

図 3-2　集成五万分一地形図東京 4 号
※昭和 20 年製版（右上部分：3-1 と同位置）。内容の古く戦時改描も施された図使用。原図を 50%縮小。

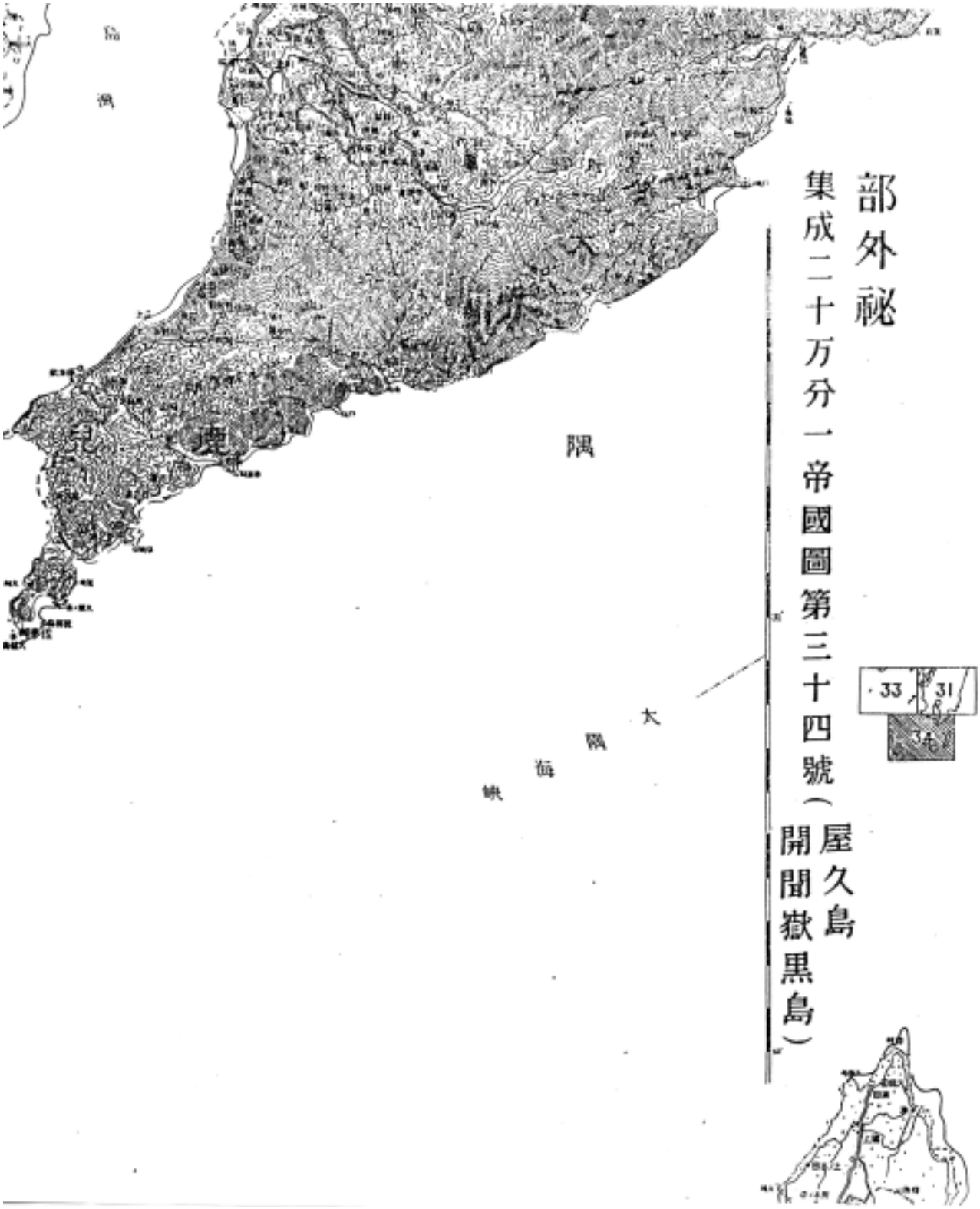


**図 4　集成二十万分一帝国図第三十四号（部分）**

**※なお本図中には当時未測の硫黄島、竹島は破線で描かれている。原図を 80%縮小。**

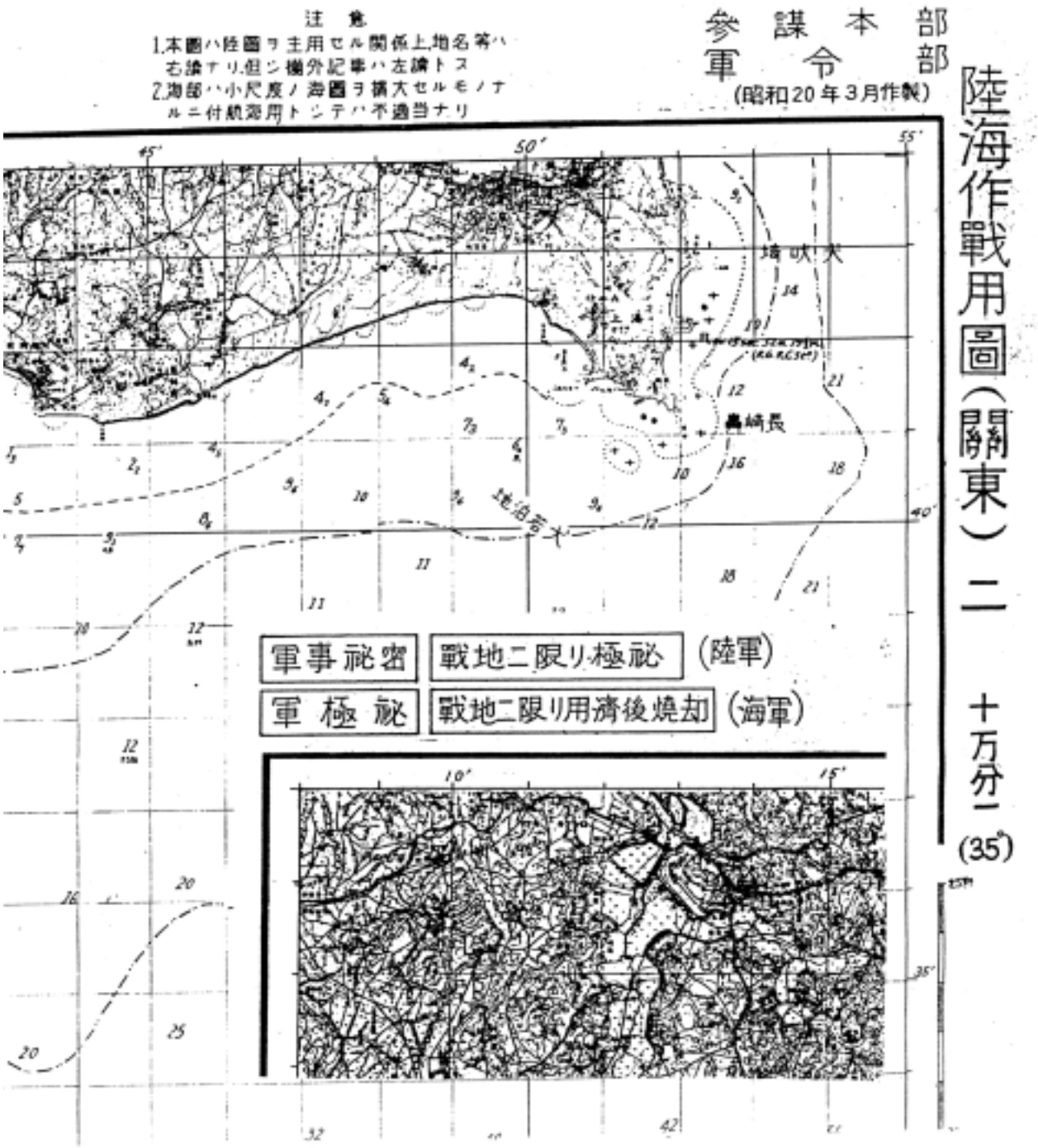


**図 5　陸海作戦用図関東其ノ二 1:100,000 千葉附近（部分）**

**※原図を 80%縮小。**

# 地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後

佐藤　久（東京大学名誉教授）

**[編集者のまえがき]**

以下は第6回外邦図研究会(日本地図センター、2004年11月27日)における佐藤久先生の講演の記録(その1)である。佐藤先生は、水谷一彦氏(平凡社)の紹介により、第4回外邦図研究会(駒澤大学246会館、2003年11月8日)に出席いただいて以後、第5回研究会(お茶の水女子大学文教育学部1号館711室、2004年6月19日)にも出席くださり、たびたび貴重なコメントをいただいてきた。終戦前後に東京大学の大学院生として教室外の各種の活動に参加され、地理学界だけでなく陸地測量部についてもご存知のことが多い。こうした先生の体験を中心にこの時期の事情をお聞かせいただけないかとお願いしたところ、引きうけてくださり、この講演が実現することとなった。

先生の講演は大きくわけて、①東亜研究所での地図関係の調査業務（1941-1942 年）、②ニューギニア調査（1943 年）、③陸地測量部での写真判読作業（1944 年）、④兵要地理調査研究会の会合および関連した資料作製活動（1945 年）、⑤終戦直前に予想されていた米軍上陸にそなえての調査活動（1945 年）、⑥終戦前後の陸地測量部における資料焼却(1945年)、⑦終戦後の写真測量学会（第1次)、⑧講演をめぐる質問と応答、にわけられ、きわめて内容豊富である。また貴重な戦前の地図、空中写真の現物を紹介されながらの発表であった。

そのため、講演記録として一度に原稿をまとめるのは容易ではなく、佐藤先生にご相談の上、複数回にわけて印刷に付すことにした。また、一部は前後を入れ替え、参考的事項、注記などの補正・追加（おもに脚注部分。戦前の勤務先は日本地理学会会員名簿などによる［昭和 16・17 年 12 月現在のものを使用］）も加えていただいた。今回掲載するのは、上記の①および②である。なお、上記③以降では、多数の地図や空中写真が紹介されるが、この掲載等については今後の課題とさせていただきたい。

## はじめに

[本文は、録音テープからの起稿・編集であるが、補修的語句や冗長煩瑣な挿入句などは註にして文末に移した。理解を助ける目的で補った註記もある。また、先輩諸先生の生没年・役職等には出来るだけの正確さを期したが、万一の誤りがあれば御寛恕を戴きたい。]

私が大学（東京帝国大学理学部地理学科）に入りましたのは昭和16年、西暦1941年で、六十何年かの昔になります。小学4年生ぐらいの時だったでしょうか、地理の授業で、廃藩置県という、その時点からは約 70 年前、随分の大昔で、化石にでもなったような時代の話、と、聞いたことがありました。今振り返ってみれば、終戦もはや 60 年になんなんとする大昔で、「戦争を知らない子供たち」がもう定年。もっとお若い方は、おそらく中生代位の話、と感じていらっしゃると思いますが、当時を体験した人間の残り少ない一人として、その前後のあれこれを、できるだけお伝えして置きたい、と思います。

## 東亜研究所での手伝い

大学に入って間もない頃に、田邊健一・伊藤隆吉などの先輩[1]からの、ちょっとお「手伝い」に来ないか、という話があり、級友二三名で東亜研究所へ時々行くことになりました。勤務時間は別に決まっておらず、手の空いたときに来ればよい、という形です。今で云えばアルバイトですが、その頃のアルバイトという言葉は、学生にとっては論文、特にドクター論文を書くような仕事を指していて、また一般の人々には、無償で働く「勤労奉仕」を意味していました。日中戦争が始まって以来、男性ばかりでなく馬やトラックまで徴発され、国内の労働力不足が激しくなっていましたから、 ナチス=ドイツ流のアルバイトディーンスト［Arbeitdienst］を翻訳したそういう名目で、学生その他を工場や農場へ駆り出した訳で

1　当時、企画院に酉水孜郎(すがい)(1904-85)・田邊健一(1917-85)東亜研究所には発足時に尾原信彦(19xx-95)・西田正夫(1909?-48?)、のち伊藤隆吉(1914?-86、成蹊高校兼任)・上野福男(1909-2000)などの地理学者が奉職していた。

す。

東亜研究所は、昭和 13(1938)年の 9 月にできた研究所です。はっきりと調べたことはございませんが、前年の昭和 12(1937)年の 10 月に生まれた企画院というお役所の外郭団体、だったのではないかと思います。太平洋地域関連の統計書とか文献類を集め、それを翻訳して出版するのが、メインな仕事だったようで、そういう資料が、官庁や民間の研究所、あるいは図書館や大学も含めて、何処にどんなものがあるか、何処に行けば借り出せるか、というようなことを調べるのが、我々の仕事でした。この「手伝い」仕事の依頼は在京の各大学に来ておりまして、全体では 20 人前後もの学生がいたようです。関西・九州とか地方の図書館・研究所には、所員が出張するか、各地それぞれにアルバイターを募るかをしたのでしょう。

この仕事が大体一段落した秋頃からだと思います。今度は、東亜地域の、当時の言葉で云えば大東亜圏の、いろんな種類の地図を調査すると云うことになりました。何処にどんな地図がどれだけあるかをリストアップする仕事に変わった訳です。これが纏まったのが昭和 16 年度の末頃です。完成した目録は、それらの地図類を所有する各機関へも寄贈しましたが、私のところにもガリ刷りの目録が残っておりました。これはどうも、校正チェック用に配られたものではなかったかナ、という気が致しますが、外邦図研究用に小林先生を通じて大阪大学に寄贈致しました（東亜研究所資料課編『南方地域地図目録』1942 年7月刊）。実際に配布された完成版は、活版刷りでかなり立派な表紙の付いた冊子です。今では、戦前の役所も会社もほとんどが無くなったり、他の名義に変わったりしておりますので、リストにある中で現在も使えそうな地図は、大学所蔵のものぐらいでしょうか。それらも図のスケールが一般に小さくて、何十万分の 1、或いは何百万分の 1 という小縮尺図が大部分でしたから、野外の調査などの役には立たないのではないか、という感じがいたします。また、多少ながら個人の所有物も入っておりましたけれど、所有者の多くも故人になられています。

## 東亜研究所での見聞

東亜研究所で面白かったのは、作業室の壁に大きな大東亜地域、つまり東南アジアの白地図が貼ってございまして、これに「何月何日」と日付の入った日本軍の前線が赤い線で書き込まれていて、それがだんだん先へ行く訳ですね。純真無学な学生としては、それが非常に嬉しいんです。線がいつまでも動かないような時には、いったいどうなっちゃったんだろう、と心配したものでした。

また此処には、実は大本営の陸軍部と海軍部、つまり参謀本部(陸軍）と軍令部(海軍）から派遣された人たちもおりまして、雑談の折に時々、一中には意図的に、わざと流しているのではないかな、と思われるようなものもありましたが一今で云えばマル秘の情報が聞こえても来ました。マル秘雑談の中で未だに記憶に残っているのは、大東亜戦後の、占領地域をどう処理するか、という話でございます。

順不同で申し上げますと、先ずは南部アジアのインド。当時のイギリス領印度（インド半島とセイロン島）に加えて英領ビルマ[2]、今のミャンマーまでを含みます。ここには、ネール（戦後はネルーと発音するのが一般的）と云う名家がありまして、独立後の初代首相になったジャワハルラル・ネルー(1889-1964 年）や、そのお嬢さんで、やはり首相になって、後に暗殺されるインディラ・ガンディー(1917-1984 年）の出た家でございます。それに対してチャンドラ・ボース(1897-1945 年）。思想的にネールとは別の立場で対立的だったんですが、海外に、日本にも亡命したりして、独立運動の一つの中心になっていた人でした。この二人を仲介して和解させ、彼らを中心とする政府を作らせて独立させる、という計画でした。独立とは云っても当時の日本が意図したのは、満州帝国のような傀儡政権を作ろう、ということであったのかも知れません。

次に和蘭領東印度。現在のインドネシア共和国と呼ばれる地域ですが、ここは、島がたくさんあって面積的にもかなり広い。この中で、ジャワ島およびその東の小スンダ列島は、人口密度が非常に高く、宗教的にもまわりと違っていてイスラム教徒が多い。直接統治は大変で、日本の手に負えそうにもないから、これも避けよう。つまり蘭印は、人口密度の小さいところ［スマトラ・ボルネオ（カリマンタン）・ニューギニア（イリアン）など］だけを取ろう。ジャワ島ほかの中心部は独立国家に、と。

一方フィリピンは、19 世紀末の米西戦争でスペインか

[2] 1937 年に印度から分離(なお英領)。

らアメリカが奪い取った土地ですが、独立（1935年）後も米軍の軍港や空軍基地があり、軍事的にはアメリカ領土に変わらず、何よりも、長い統治のもとで思想的・文化的にアメリカナイズされている。そこで、住民の「皇化」が十分に進むまで― ということは、要するに半永久的に― 日本が直轄統治する必要がある。

さらにシンガポール。ここは英領マレー半島の突先にある小島ですが、地政学的に非常に大切な場所である。当時は、日本でも地政学が大流行[3]していました。特に「皇国地政学」。 皇国の地政学というのを、京都帝大の先生[4]がたいへん強調されまして、皆さんがそれに傾倒した時期でございます。そういう重要な場所であるから、ここは、絶対・永久に日本が確保する、しなければならない。そこで、地名も「昭南島」と改めることになりました。

こうした改名はあちらこちらで行われ、語呂合わせのような漢字への置き換えもありました。例えば、蘭領東印度のセレベス（スラウェシ）島の南西端に、マカッサル[5]という港市がございます。日本人移民が結構多かったところですが、これを三笠―日本海海戦時の戦艦三笠、元は三笠山ですが―その三笠に改名する、ということもありました。

東のニューギニアやソロモン諸島については、人口密度も低いし文化度も低い。要するに「野蛮人」しか住んでいないところだ、として、日本人移民をどんどん送り込んで開発しよう、の計画。文字通りの植民地ですね。そこで、このニューギニアも、南のヤマトの国、「南大和」と改名しようと・・・。しよう、ではなくて、「昭南・三笠」と共に政府が新聞発表までもしたのです。

残るのは、当時の仏領インドシナ、今のベトナム・カンボジア・ラオスの 3 国ですが、これとその他の細々したところ（英領のマレー半島やボルネオ島北半、ポルトガル領チモールなど）は、なるべく近い将来に独立させるけれど、少なくも鉱産資源の開発は日本が中心になって行う必要がある。 と言うのも、いろんな鉱産物、特に石油資源、蘭印(和蘭領東印度)のスマトラ島や英領ボルネオ北海岸の油田などがありますから。

昭和 15(1940)年に（仏印進駐で実質的に）戦争を始めてすぐに軍がしたことは、日本石油会社、戦争中は帝国石油と社名が変わっていましたが、その採油技術者を総動員することで、彼らを兵隊と一緒に送り込んでの油の確保です。(翌年)12 月 8 日の宣戦布告に至ったそもそもは、満州や中国で勝手なことをやっている日本を懲らしめるには、油の供給を絶つのが一番だろう、という訳でアメリカが対日輸出禁止を決めた(1939年7月、日米通商条約の一方的破棄を通告)、そのことが原因だ、と言われますが、とにかく、戦時にも平時にも石油が一番大事！[6]、というお話です。

近年、海南島の南方の小さな珊瑚礁の島々について、中国とフィリピン、あるいはベトナムが領土争いをしています。中国名は南沙諸島ですが、日本では当時、確か「新南群島」と名付けたんじゃなかったかと思います。そういうところも、海底油田があるかも知れないので確保して置く必要がある、と言っていました。

そのほか、タイ[7]は、(山田長政の渡航する)江戸時代よりも前から日本人が行っており、(戦前は)王様も訪日したりして、大変に交友関係のよろしい国です。フランス領とイギリス領に挟まれた緩衝国として独立を保ってきた、保てて来たということで、日本の協力者、と位置付けていました。

こういう構想は、いったい何処で考え出して、何処で承認されたものなのか。一向に判らないのですけれど、翌昭和 17(1942)年の 11 月に「大東亜省」が設置されたところからみると、やはり、軍部だけではなくて文官も加

---

3 その頃の書店には、ナチスの精神的指導者とも云われた ハウスホーファー（Haus-hofer,K.E.N.1869-1946、ベルリン大学の地理学教授で、陸軍大将の地位にも任じられた）の『地政学(ゲオポリティーク)』が、ヒトラーの『我が闘争(マインカンプ)』や東条英機首相の伝記などと並んでいた。

4 史学科地理学教室の小牧實繁教授(1898-1990)。神職の出自で、著作では甚だ舌鋒鋭く、手当たり次第に切り捲る闘士の印象であったが、それは影絵。実像は礼儀正しい紳士で、講演会場では背筋を伸ばして音吐朗々と話され、また、ほとんど身じろぎもせずに聴講されていた。戦後、教職追放の憂目に遭われたが、やがて滋賀大学教授に復職、学長も務められた。

5 モルッカ［マルク］地方が香料諸島と呼ばれた頃からの東西貿易の中心地。今はウジュンパンダンと改名され、マカッサルの名はカリマンタンとの間の海峡のみに残る。

6 松根油（しょうこんゆ）から航空燃料や重油の代用品が得られるため、勤労奉仕・勤労動員の学生生徒も加わって、各地で松の伐採と根掘りが行われた。戦後の拡幅で失われたと思われがちな旧街道沿いの松並木なども、多くは戦中に姿を消している。また、潤滑油の補いに「ひまし油」が増産され、民家にもヒマ（蓖麻・トウゴマ）の栽培が勧奨された。ガソリン代りに木炭の乾留ガスで走る「木炭(後には薪)自動車」が一般的となり、戦争末期には燃料不足で動けない艦艇さえも増加していた。

7 1939 年に不平等条約の改正に成功し、国名もシャム(暹羅)からタイに変更。日本と攻守同盟を結んでいて、第二次大戦では昭和 17(1942)年に米英に宣戦布告もした。

わって協議した結果、或いはその途中の叩き台みたいなもの、だったのではないか、と思っております。振り返ってみますと、東亜研究所でアルバイトをして、何が一番の収穫かと云えば、この「夢物語」を聞けたことかも知れません。これが、昭和 16 年から 17 年の 5 月か 6 月頃までの経過です。

## 海外調査、とくに田山・多田両先生と陸海軍

昭和 17 年の夏が過ぎた頃、地理学教室に、田山利三郎という東北帝大の先生が見えられました。辻村太郎（1890-1983、当時、東京帝国大学助教授)先生と面談されての用件は、ニューギニアに調査団を派遣するについての協力要請でしたが、これに関しては、後でお話し申し上げます。この方は地質学教室の助教授ですが、当時、いっぱい肩書がありまして、海軍省水路部嘱託、南洋庁嘱託、それに、南洋庁がパラオの島に作った熱帯産業研究所の嘱託も兼ねておられ、大学での講義はほとんど無くて、専ら珊瑚礁の調査をされていました。そして、東北帝大理学部の紀要などに、第三紀珊瑚石灰岩や新しい珊瑚礁の地形・地質の論文をたくさんお書きになり、日本地理学会の会員にもなっておられました[8]。 なお、お齢を召した方はご記憶と思いますが、戦後、昭和27(1952)年9月に、青ヶ島の南方で明神礁という海底火山が噴火しました。田山先生は当時、海上保安庁水路部測量課長(東北大学教授を兼任)で、調査船の第五海洋丸を指揮してその調査に行かれましたが、たまたま火山活動が静かだったので、もっと近付けられるだろうと船を進めたとたんに大きな海底爆発が起き、船もろとも全員 31 名が亡くなられた。そう推測するしかない、劇的な最後を遂げられたのでした。

ちょっと横道に入りますが、戦後間もなく、人文系の各種学会が一緒になって、互いに議論し合いながら研究や現地調査をしようではないか、という機運が高まりました。そしてその試み、野外総合調査の最初のものとして、昭和 25・26(1950・51)年に「八学会連合」の対馬調査[9]が行われ、その初年度には田山先生も参加されました。私は、助手のような格好でその後ろにくっついて、半月ほど対馬を歩き回ったのですが、期待したニューギニア調査の裏話などは、あまり話されませんでした。共同調査の対象に対馬が選ばれたのは、その歴史・民俗的な、また地理・地政学的に特異な位置と性格が重視されたものです。この八学会連合は、その後「九学会連合[10]」になり、能登半島とか、返還された直後の奄美諸島、あとでは佐渡や下北半島なども調査しました。言わば辺地の総合・共同調査をさかんに実施したグループでございます。

違った学問分野の人々が一緒に野外調査をする、という構想は戦前からあったもので、とくに、占領地として新しく視野に入ってきた中国大陸を対象に、各種の海外調査が行われていました。地理関係の例をちょっと挙げますと、昭和 8(1933)年の熱河学術調査。これは第一次の満蒙調査で、隊長は多田文男先生(1900-78 年、当時、東京帝大助教授)。次は昭和 13(1938)年の蒙疆学術調査。人文・社会系を含む京城帝大メンバーが主体でしたが、団長はやはり多田先生。翌 39 年には、東亜研究所が中心になっての北支・蒙疆のレス（黄土）に関する学術調査です。当時日本地理学会の会員でもあった地質の徳永重康氏が団長で、多田先生は副団長。地理は上田信三(1913-44?年)・保柳睦美(1905-87 年)・矢沢大二(1913-94 年)の東大卒業生ら[11]が参加していま

---

8 昭和 27 年秋に、これらの業績が評価されて日本地理学会賞の受賞候補に推され、翌年春の地理学会総会で授賞。

9 八学会連合初経験の野外共同調査は、前年度が日本宗教学会、当年度は日本地理学会が当番学会で、文部省科学研究費・長崎県補助金・対馬町村連合会寄付金などを運営費に充て、また米穀の特配を受けて民家宿泊の便を計らった。直前(6 月 25 日)に朝鮮戦争が勃発したこともあって事務量が多く、参加者は木内信蔵・河野通博・小堀巌・佐藤 久・関口武・田山利三郎・前川文夫・山階芳正と、学生の大原久和・矢橋謙一郎の計 10 名[日本人文科学会編『人文』1-1、有斐閣、1951]で、日本人類学会に次ぐ多数であった。地理学評論日本地理学会 75 年史特集号(2000 年 4 月)には、調査員に織田武雄・西川治・藤岡謙二郎 3 氏の名も見えるが、これは科研費申請段階のものと推測される。また前川氏は植物分類学者で東大助教授。強い希望により一時的に地理学会員となって参加したもので、同様な一時在籍会員は他の学会にも存在したが、建築学会員某氏のように、共同調査員を装って迷惑をかける不心得者も介在した。なお、当時は韓日間の密輸が盛んで、対馬浅茅湾には保安庁厳原海上保安部の警戒・取締用舟艇が多数駐在しており、田山会員の筋で、連絡・交通などに便宜供与を受けることが出来た。

10 昭和 22(1947)年に日本言語学会・民間伝承の会・日本民族学協会・日本社会学会・日本人類学会・日本考古学会の「六学会連合」として発足。翌年、日本地理学会・日本宗教学会が加盟して「八学会連合」となり、年交替の当番学会制で運営し、共同課題の研究発表を行う春の連合大会と特定地域での夏季の共同調査（昭和 25 年以降）に、学会連合体としての特徴を発揮していた。昭和 26(1951)年に日本心理学会を加えて「九学会連合」となり、以後は加盟学会の増加による改名を廃止。平成 2(1990)年に、役割を終えたとして解散した。

11 当時、それぞれ、東亜同文書院(上海にあった専門学校で、

す。保柳・矢沢の両氏は後の都立大学教授ですが、保柳さんは一時地理調査所に籍を置かれ、文部省にも在籍されました。

次は、内蒙古の渾善達克沙漠の調査。1940と41年ですね。これは興亜院が主体で、地理では多田・保柳先生が参加。そして最後は 42 年。資源科学諸学会聯盟[12]・興亜院及び北支派遣軍が中心になった第一次山西省学術調査（戦局悪化で第二次以降は実施不能）でした。参加地理学者は、多田先生（資源科学研究所々員兼務）、副団長に渡辺(光 1904-84 年 当時は陸軍予科士官学校教授で資源科学研究所嘱託)先生。それに、花井(重次 1900-xx 年 同東京高師教授)先生、陸水学の吉村(信吉 1907-47 年 同陸軍予科士官学校教授)さん、人文地理の木内(信蔵 1910-93 年)さんと新井(浩 1911?-xx 年 同陸軍予科士官学校教授)さん、浅井(辰郎 1914- 同満州帝国建国大学教官。元お茶の水大学教授、日本地理学会名誉会員)さん[13]に 和田憲夫(19xx-50?年同北支開発調査局)氏という方々。

これらの調査には全部、多田先生が団長または副団長なのですから、陸軍と多田先生との関係がいかに強かったか、を示してもいます。これは当然、1945 年の終戦直前の、参謀本部からの外邦図の持ち出しにも繋がるものでしょう。

## ニューギニア調査団とその初期計画

昭和 13 年頃だったでしょうか（正しくは 15 年 1～5 月)。林学博士で植物分類学者の金平亮三(1882-1948 年、元九州帝国大学教授）とおっしゃる方が、蘭領ニューギニアへ植物採集にお出掛けになって、後に『ニューギニヤ探検』[14]という本を出しておられます。田山先生は、この金平氏に助手として同行されていました。

一方、さっき話に出た資源科学諸学会聯盟、これは当時、文部省内の組織で、後の資源科学研究所の母胎にもなったものですが、ここで金平探検記が話題となり、面白そうじゃないか、植物だけでなく他の分野も一緒になって調査をしてはどうか、と話が具体化の方向に進みました。そして、傘下の諸学会に諮問[15]をしたりして、探検の具体案についての検討も進んだのでした。ところが対米戦争が始まり、日本の占領地にはなったものゝ勝手に行けるところではない。すべて、軍のバックアップを得なければならない。そこで、はじめは陸軍に話を持ちかけたようなのですが、その時には既に、陸軍はオランダ領からオーストラリア委任統治領―-今のパプアニューギニアや、さらにその東（ソロモン諸島）の方に行ってしまっていました。後方は、オランダ領は海軍に任せて。海軍はそこに民政府、ニューギニア民政府を作って統治する、と、どんどん現実の方が先に進んでしまいまして・・・。そこで諸学会聯盟がどう動いたか、そこまで詳しくは判りませんが、話は当然、海軍の方に行きました。最初は、学者先生が中心になり、それを軍が守って、という構想でしたが、それがすっかり引っ繰り返りまして、民政府の中に調査局を作り、そこに付属する調査隊と云う形で実施しよう、となったのです。

そこで、海軍省ニューギニア民政府の中に、「調査局」[16]と、その下部組織としての「ニューギニア調査隊[17]」が編成され、調査隊長には、ニューギニア（以下、適

---

同年、大学に昇格。源は明治 32 年にまで溯る。)・東京府立高校・陸軍気象部に勤務。

12 1941 年 1 月、文部省内に設置。同年 12 月「資源科学研究所」の官制を公布し、翌年興亜院と共同実施予定の「山西省学術調査」の隊員(本文に既出)を選考。1942 年 11 月、資源科学研究所を開所して解散。なお、資源科学研究所（初代所長は植物の柴田桂太博士。地理部門には多田文男・小笠原義勝(1915?-64)・坂啓道(1918- )氏が所属。庁舎は当初、青山高樹町にあり、本館は明治調の洋館で、広い庭園と倉庫が付属していた。昭和 20 年 5?月の空襲で付近一帯と共に焼失）。

13 訂正。会場では 浅井治平(1891-1974 立正大学教授。辰郎氏の尊父)先生と発言したが、それは、大学で多田先生と同期であるところからの、演者の錯覚であった。

14 養賢堂、1942 年 1 月発行、346 頁。内容は植物・動物・住民・産業・探検史など多岐詳細にわたる。日本出版文化協会の推薦図書となり、半年後に 1000 部を訂正再版するほど好評であった。

15 1941 年 2 月、資源科学諸学会聯盟地理部会（日本地理学会・日本陸水学会・京都探検地理学会で組織）が、ニューギニア探検に関する同聯盟会長からの諮問（希望する調査項目・期間・地域・経費その他）に答申［日本地理学会 75 年史］。同様の諮問は、地理以外の諸部会に対しても行われた。

16 調査局には、調査隊の他に、某落選代議士の暗躍で、彼の率いる建設労務者数十名からなる「設営隊」があった。当初は、各調査班に設営班として分散付随し、調査用の宿営施設を作るのが任務、と聞いていたが、そのようなことは全く無く、最後までマヌクワリの宿舎で徒食し、徴兵逃れが狙いでの参加か？とも疑われた。

17 軍では「調査隊」と呼んだが、「隊員」は「調査団」とも自称した。なお、田山氏の上司で恩師でもある矢部長克東北帝大教授(1878-1969）が顧問に就かれ、マヌクワリにも一度、視察・激励に見えられた。国立大学の古参教授は当時、大臣や軍の将官と同じ勅任官待遇で、矢部教授の乗船には中将旗が翻っており、海軍中将に昇進したばかりの民政府総監も埠頭までお出迎えの礼

宜N.G.と略称) 探検の経験があり、水路部嘱託として以前からの関係も深い田山先生、その補佐役として、京城帝大の、当時学生主事補の民俗学者泉靖一(1915-70 年、戦後は明治大学、東京大学教授)氏が任命されました。隊の構成も、諸科学連盟当時の夢よりも飛躍的に大きくなり、第一から第八までの八つの班[18]を作り、東北帝大・資源科学研究所・東京科学博物館・京都帝大・南洋庁・南洋興発会社、それに水産研究所と電源開発株式会社に振り当てゝ調査員を集める、という話になりました。水産研と電発は後から追加されたもののようで、別組織だった可能性もあります。

調査団の実現段階では、京大の先生らは参加せず、京城帝大と九州帝大の一部[19]が加わりました。民政府構想では、各班には地質・鉱物(鉱床)・林業・農業・医療一隊員のお医者さん役、兼、人類学一及びルートマップを作る測量、並びに設営の各班、とは、班の中の班が設けられ、医療までのそれぞれには奏任官待遇の、だいたい大学の助手や若手助教授クラスの調査員を置き、調査員には判任官待遇の助手を付ける、とのこと。助手は理系の大学生または院生クラスで、文系のそれらは、連絡員という肩書です。その結果、総計で奏任73名、判任 291名、その他59名という、非常な大員数になりました。これに加えて、護衛あるいは通信(無電)連絡のため、各班に2名以上の水兵を付ける。交通機関としては、機帆船[20]を 2 隻。ダイバーボート[21]2 隻、武装一機関銃が付いた程度ですが一大発[22]が 10 隻。その他にゴムボート 12、トラック 10 台等を準備して、2月から9月の間に1ヵ月あるいは1ヵ月半の調査を3〜4回行う、というまことに壮大な計画。

以上の数字は、すべて調査局長ほか担当者の説明に従うもので、第三班々長の植物分類学者、佐竹義輔(1902-xx 年、 当時は東京科学博物館学芸官) 氏が 1963 年に出版された『西イリアン記』[23]の中に、克明に記録されています。

以上のほかに、いちいちリストアップしきれない程の各種資材と食糧、写真フィルムや調査用消耗品はもとより、オランダから押収した地形図の複製や日本軍撮影の空中写真も供与される、手筈になっていました。その当時(戦前)、オランダの「蘭領N.G.石油会社」と「蘭領東印度航空会社」が協力して、空中写真を撮影し写真から地質図を作る、という作業を実施していました。その基図には、すでに五万分一ないし十万分一の地形図も完成していて・・・。そんな話を大衆科学雑誌[24]で見ていましたから、その成果品でも使えれば有り難い、と思ったものです。然し、後年、私が陸地測量部で仕事をするようになってから(後述)知ったことですが、このオランダの作業も、主要地域を局部的に図化した程度のものでした。地形図も、部分的には十万分一図も出てきましたけれど、あとは二百五十万分一ぐらいのもので、これでは、実際に山道なんかを歩くには使えません。そんな縮尺はともかく、結果的に地図はもちろん空約束。空中写真を貸与！の方は、かなりの可能性があったと思うのですが、これも実現はしませんでした。

## ニューギニア調査隊の現実

いま述べたような膨大な計画は、実際の調査隊結成時には著しく縮小されており、隊員総数も約 250 名と、予定の半分くらいになっていました。 現地ではそれで

---

をとった。児戯に類するが、調査団の若造としては 胸の空く快事であった。

18 後記の『西イリアン記』によれば、調査隊は後2者を除く六班構成で終始している。

19 現職とは限らず、広島医大・鳥取高等農林・岐阜高農その他、他校在籍の卒業生も含まれる。

20 焼玉エンジンを搭載した200〜250トンほどの帆船。無風の時はエンジンで走るが、風があれば帆走して燃料を節約出来る。おもに関西〜上海などを往復して物資輸送に当たっていた。200人以上もの乗船が可能。

21 天然真珠を採るダイバー(潜水夫)が乗る20〜30トン程度の小型機帆船。白蝶貝・黒蝶貝などの「真珠貝」は、貝殻も貝ボタンなどに加工・利用された。戦前は、委任統治 領のパラオ・トラックなどの島々やオーストラリアのダーウィン・ケアンズなどの港を基地として、アラフラ海で活躍した。20〜30人ほどの人員を運べるので、制空・制海権を奪われたソロモン海域での撤収作戦にも転用された。

22 大型発動機付舟艇の略。鉄製平底の上陸用ボートで、搭載した戦車が自力で上陸出来るように、舳先が方形で前方に開き倒せるように出来ていた。

23 1963年、廣川書店発行。索引等を除き342頁。表題の西イリアンは、インドネシア独立後の改名によるもので、副題は「ニューギニアの自然と生活」。約3分1が調査に至るまでの経緯その他で、異邦調査団企画運営の参考にもなる。

24 例えば科学知識普及会発行の「科学知識」。手元に残る同誌21巻11号には、上床国夫(鉱床学、東大工学部教授):東亜共栄圏の石油資源、木本氏房(大日本航空株式会社航測所長、陸軍大佐):航空写真測量と其の使命、などの記事があるが、後者に付随する筈(目次と本文表題には残る)であった「照魔鏡のやうな航空写真」という口絵写真は、指示または自粛でカットされている。対米開戦前(昭和16年11月)ながら、すでにそのような時勢であった。

も、そんなにもいたのかな、と思うほど少数になった印象（実員は170名前後？）でした。予告された交通手段も、もちろん皆無。陸上は徒歩、海上では、民政府所有の僅か2隻のダイバーボートを融通し合って使わせて貰う、という状態でした。

何故そんなに縮んでしまったかと申しますと、調査計画が実施に移された昭和18(1943)年の初頭には、すでに、グヮダルカナル島（ガダルカナル、略してガ島または飢島）をめぐるソロモン諸島（英保護領）での攻防戦が、日本軍の敗退で終わりを迎えかけていた時期、より正確に云えば、陸軍部隊の「転進(退却の言い繕い)作戦」の最中、だったのでした。すでに、大規模な資源調査などを実施出来る状態ではなくなっていたのです[25]。

調査団並びに民政府要員は、1月13日に横浜を出港。パラオ寄港の後、2月5日に西ニューギニアの首都マヌクワリに入港しました[26]が、大本営による「ガダルカナル島とラエ[27]から転進」の発表は、その僅か5日後のことでした。戦況の内情は調査員にも説明されなかった―判任官待遇以下は全く蚊帳の外―ようで、パラオでも、上陸後も、調査団本部では連日連夜の会議続き。話が違うじゃないか！　軍の言いなりになり過ぎる！班の編成も調査計画もクルクル変わる！　装備も不足だ！　etc.で、調査局長（海軍主計大佐）と調査隊員との間で、田山隊長と泉補佐役は大変な苦労をされたようです。

その間、私たち判任官待遇以下の軍属は何をしていたか、と云うと、食事当番に加えて、はじめの五日間ほどは沖仲仕補助の使役[28]。デリック(マストに付属するクレーン)で船倉から艀（はしけ）へ食糧・資材入り木箱を移す作業です。何箱も大きな網で吊り上げて。本職からは、結構なことも教わりました。頑丈な木箱も、角を艀に軽くぶち当てる、それだけで簡単に壊れるんです。勿論、本船と艀とでの阿吽（あうん）の呼吸。知らぬ間に、缶詰やなんかがポケットに引っ越していて！　学生らは自分では取らない。仲間に恵むんです。私も熱心に加担しました。駆り出された若手隊員は、これも当然の報酬！との認識で・・・。使役を免れ、分け前だけに与かっていた調査員諸先生も、たぶん同罪でしょう。

荷揚げが終わると、埠頭横の南洋興発倉庫から調査隊宿舎までの荷運びです。床に敷くアンペラ(筵（むしろ）)や大きな蚊帳、毛布など、取り敢えずの品々は到着直後に宿舎へ運び込まれてあったのですが、私物を入れた木

---

25　日本軍は、米豪の連絡路を遮断する意図で、ポートモレスビー攻略を図る一方、前年7月にグヮダルカナル島を占領し、僅かに平地の開けた首都ホニアラに飛行場を建設したが、ミッドウエー攻略作戦の失敗による航空戦力の劣勢化もあって同8月以降の　同島争奪戦に敗れ、パプア=ソロモン海域からの全面撤退をも余儀なくされた。国民には知らされなかったものゝ、田山先生が大学や研究機関を巡って参加を勧誘された秋頃には、すでにこの状態に陥っていた。軍による大調査団の企画・強行も、或いは、一種の「謀略」であったのかもしれない。

☆　なお、当日多弁した昭和17年4月18日のB25陸上爆撃機による本土初空襲、それに誘発されたミドウェエー島攻略戦の大敗、ソロモン海戦始末談義などは、戦後多数公表された戦記類に譲り、以下には、談話では省略した調査団事情などの二三を述べたい。

26　日本郵船の白山丸、約1万屯近い石炭焚き蒸気貨客船で乗船者2千余名。東ニューギニアとの境界線に近いホーランディア(現、ジャヤプラ）へ行くと云う第八建設隊の妙高丸(千屯級ディーゼル高速貨物船)と船団を組み、黒煙と低速とで恨みを買った。奏任官待遇以上の男性と女子挺身隊で志願？のタイピスト・看護婦の数人がキャビン、以下は「蚕棚（かいこだな）」に収容された。蚕棚とは、腰をかがめてやっと通れるほどの高さで船倉を数段に仕切った寝食用の床で、第二(資源研)班の助手3名は、調査員3名の船室に割り込み、夜は各ベッド(1個は仮設)の下で過した。招かれざる客、また「軍律違反」である。以下はマヌクワリ(マノクワリ)着後の日記。当日：荷物運搬の使役で「・・・民政府・調査局・調査隊・軍ら相互間の連絡頗る悪しく、命令系統又乱雑にして要領を得ず。数時間を興発桟橋にて無為に過し、漸く調査隊関係の荷物を宿舎まで運搬するを得。・・・」。

10日の日記：「・・・家郷を出て丁度（ちょうど）満一ヶ月である。・・・修正に改訂を加えた調査試案が本部から出され、地質鉱床班で検討していた様子であるが、・・・やはり時期尚早である。調査隊の存在の薄きとその価値の低きとは、全く予想の外にして、種々の問題、不平、意見の齟齬等の生ずるは、田山先生の責任と云はんよりは寧ろ民政府関係連中の無理解と、加ふるに人手不足、材料欠乏、食糧・船舶の不如意等と、開府早々の多忙とに依るものであって、結局するところ、・・・学術調査隊なる組織（組成の意）が早きに過ぎたるため・・・現在の如き情勢下にかかる大規模な調査団を組織したことに根本的な誤がある・・・。昼、榊原氏が大本営発表をもたらす。・・・」

27　ニューブリテン島の対岸に当たるパプアニューギニアの港市。陸軍によるオーエン　スタンレー山脈越え、ポートモレスビー攻略戦(大敗)の重要基地になっていた。

28　ムスケルアルバイト（筋肉労働）の下命は航行中からのことで、炊事当番は当然としても、意味不明な丸太運びなどもさせられた。我々が何でこんなことを！と怒る学生もいたが、対潜見張番(2時間交替で潜水艦や魚雷を見張る)と共に船員と親しくなる機会でもあり、軍隊内の、したがって救命ボート乗船時の序列、「将校・兵卒・軍馬・軍犬・伝書鳩、付けて軍属」や、「さらばハワイよ、また来るまでは・・・」で始まる流行歌『南洋航路』なども教わった。その替歌「さらばラバウルよ、また来る・・・」は、今こそ歌う人も無いが、戦争末から戦後惜昔のタケノコ生活の時期には一世を風靡した。なおラバウルは、豪州委任統治領の政庁があった（後に噴火災害を避けてパプアのラエに移転）ビスマーク島北端の町で、カルデラ性の良港湾に恵まれ、ソロモン作戦を支える海空の大基地となっていたが、米・豪軍の急な西進で孤立、敵中に取り残された。

箱や調査用資材、それに、荷揚げが遅れたパイプ製折畳み個人寝台用の蚊帳や食品類、或いは酒・煙草など配給品の受領に、当番制で間欠的に駆り出されました。10 台ある筈のトラックが、調査隊本部にはオート三輪 1 台だけで、これはほとんど、日に 3 度の炊飯運搬使役の専属です。そこでリヤカーと背中が専らの運搬用具となり、やっと荷出しを終えたのは、上陸から半月余りも過ぎた 23 日。

調査隊の宿舎は、町の中心からほぼ 2 粁ほども離れ、熱帯雨林に包まれた低い丘[29]に立つコロニアル風の家屋大小 2 棟と、丘の中腹にあるトンガリ屋根でのっぽな建物でした。ベランダを巡らした最大の棟を隊員宿舎、その横の棟は隊長・医療班らの本部員宿舎に割り振られ、最後のトンガリ 1 棟には設営隊が入居。後に聞いた話では、ここはかつての陸軍慰安所で、日本軍が来るまではキリスト教会と付属幼稚園だったとか。町からこんなに離れて幼稚園とはおかしいので、施療病院だったのでは？とも思います。どっちにしてもマリア様のお家、と笑ったのは、若い異教徒の不謹慎でした。

民政府本部が置かれたマヌクワリ市街―と呼べるほど大きな町でもない―、そこには火炎木などが咲く南国らしい通りや並木道もあるのに、このサテライトまでの間は寂しい田舎道。ただ、道端に草合歓（オジギソウ）が咲き連なり、子供の頃のように足で薙ぎ倒すのが面白い、の程度。それでも昼は鳥の声、日が落ちるとさまざまな虫の音が集いて、2 本もある蛍の木の、雨が降ろうとお構い無しの点綴イルミネーションは、驟雨後の涼しい夜道の楽しみでした。調査隊宿舎の反対側は静かな海で、細い桟橋が一本と、付属に水洗ならぬ海洗式トイレが 1 棟。サヨリなどの魚がよく突っつきに来ていました。左にレモン島と呼ぶココ椰子の茂る低く平らな隆起珊瑚礁の小島。右手はるかには、玄武岩の古い開析火山、と調査員の何方かが解説した高さ三千米前後のアルファック山が、全山緑に包まれ、堂々と聳えていました。

調査局とのあれこれの末、調査隊は著しく変容して、隊長は局長の兼務、その下に 4 個の「隊」を置き、田山先生はその中の資源調査隊々長で、地質鉱物・農林畜産・水産・特別の 4 個「班」を指揮する、と決まりました。然し、実行動では、資源調査隊が第一～第六の班に分かれ、それぞれの班には、水産を除く 3 個「班」及び医務「隊」(医師6、他2の計8名)、また設営「隊」の設営・通信・連絡等の人員が参加する、と云うのですから、基本的には従来と大差なし。軍隊とは一限らない？―くだらない組織弄りをして、手続きばかりを煩瑣にする代物です。

## 先遣隊、ナビレ予察行

第一～六班の調査地域も一応の決着を見て、私の属する第二班[30]には、アルファック山の西部を北流するプラフィ川上流地域があてられました。ところが間もなく、守備軍からの更なる要望で第三班の調査地をヤムール地峡[31]に変更する。出来れば第二班も、その北側の地域を、と、何度目かの変転。やがて 2 月下旬には第六（南洋興発）班が勇躍ベラウ地峡[32]へ出発。第一班と第四班は 3 月 19 日にアンギ湖[33]へ出発。第5班（班長、

---

29 マヌクワリが位置するドレー湾の一帯は、平面図では人の右横顔のように見える。天狗の、と云うべきかも？鼻先にぶら下がるようにマンシナム島（田山氏の分類では珊瑚州島）が、鼻穴に当たる位置にマヌクワリの市街が開け、喉の位置には、後記するアンダイの村がある。額から鼻、さらに喉にかけて、湾岸一帯には 2～3 段の段丘が発達している。これは隆起珊瑚礁であるが、宿舎横に防空壕を掘った際には、砂礫層や粘土質な部分も見られた。オランダ語でホーヘルコップ（鳥頭）と呼ばれたイリアン北西部の半島の北岸・東岸には、これらの続きが分布している。

マヌクワリに入港する船は、マンシナム島を巡ってほぼ 180 度転針する。当時、米英に宣戦を布告した 8 日を「大詔奉戴日」と呼び、毎月、宮城遥拝などの儀式を行っていたが、N.G.民政府では、2 月の大詔奉戴日に豪州（オーストラリア）を拝む、と云う珍事があった。太陽を背に、海の方向を北とした錯覚である。

30 基本編成は、班長 津山尚（1910-2000、植物、東京女高師講師、後、お茶の水女子大学教授）・石橋正夫（191x-47?、鉱物、資源科学研究所々員、後、北海道帝国大学教授）・ 野田光雄（19xx-xx、地質、満州国新京博物館学芸員、戦後は佐賀大学教授）・田中正四（1915-96? 公衆衛生学、京城帝大講師のち広島大学教授）。助手はそれぞれに、安土孝（1921-、当時東大植物園雇員）、坂啓道(1918-、駒沢大地理卒・当時資源研助手)、佐藤(1920-、東大地理学生)。連絡員として榊原康男(1919-95?、東京文理大地理学生、のち文部省初等中等教育局）の計 7 名。他に通信・警戒の水兵 2 名(小林・樋口)。本格調査時には、松山xx(191x-、農業、岐阜高等農林、戦後岐阜大学教授)、通訳に寺坂氏のち梅本氏（共に南洋興発社員)、測量班として、青島(1919-、南洋庁技手)氏ほかカナカ族測夫 9 名。山本連絡員(海軍筆生)、さらに、インドネシア人巡警 3 名、パプア族人夫 120 余名が付いた。

31 ヘールフィンク湾奥とアラフラ海の間。

32 フォーヘルコップ（鳥頭）半島に西から深く入り込むベラウ湾とヘールフィンク湾との間。ベラウ湾岸には油田が期待されていた。

33 アルファック山の南の高地にある湖水。アンギ=ヒージ、アンギ=ヒータ（ヒージ、ヒータは姉・妹の意味とか。なお、とは英語読みではギ）の二つからなり、繋がっているとかいないとか。発電資源

波多江信広朝鮮総督府技師、190x-　、地質、戦後鹿児島大学教授）も23日にホロナ炭田調査に出発、という状況下にあっての更なる翻弄です。反対意見も多く、そこで第二・三班の一部で組織する予察先遣隊[34]が、管轄地域の巡察に赴く民政府総監の乗船『若鷹』(機雷敷設艦)に便乗し、不足になったパプア族苦力の追加募集(正しくは徴発)をも兼ねて、湾奥のナビレ[35]まで情報収集に出向くことになりました。

若鷹のマヌクワリ出港は3月5日8時、途中で南洋興発の農場があるワーレンに寄り、翌6日午後にナビレ着。ところが、ここの駐在部隊によれば、「三班の予定ルートは通過可能なるも、二班のそれには通路無く、問題外なり。」と。なぜ、こうした情報を調査局本部で入手出来ないのか？軍に対する不信感がさらに高まりました。でも、地理屋にとってはその分、見学できる地域が増えるのですから、まんざらでも無くて。

ナビレは、砂浜に木製の桟橋が一本突き出ているだけの、急造の港。海岸から 2 粁ほど入ったところで、滑走路[36]建設のための伐木・土盛り・整地作業が八分目程の進行中。コンクリート舗装は未着手で、浜辺は資材の山。工員と呼ばれる作業員数十人の宿営天幕と炊飯所があり、我々もその横に幕営しました。彼らは王子製紙からの被徴用者で、三交替、昼夜を分かたずの超重労働に疲労困憊、病人続出。現場では、パプア苦力を交えて鶴嘴・円匙(えんぴ)(シャベルの軍用語)・畚(もっこ)での土方仕事。なぜブルドーザやショベル車、クレーン車などを使わないんだ、と、今の方には不審でしょうが、そんな土木建機は、その頃の日本にはめったに存在しなかったのです。

開豁な浜辺では蚊や羽虫も少なく、背後に雨林が迫るマヌクワリの宿舎とは別天地。何の関係か、海軟風が夜まで続き、昼の炎熱が嘘のように。然し午後が原則のスコールが、これまた数時間遅れでやって来て、しばしば雨漏りするほどの豪雨にも見舞われました。

到着翌日の夜以降、護衛兵の通信用短波無電機を借りて、日本のニュース放送（日本放送協会 JOAK 東京の「海外の皆様へ」）とアメリカの対日「謀略」放送を聞きました[37]。

幕舎には、パプア人が入れ代わり立ち代わり、バナナやタピオカ(キャサバ澱粉)持参で現れました。石鹸や煙草などが欲しいのです。そうした雑貨の輸入販売を独占していたヒーナトコ(シナ人の商店)が、戦争勃発で蜂起した原住民の襲撃・略奪・殺害などで消滅した結果、との解説でした。この交易で学んだのが、ピーサンゴリンと呼ぶバナナの天麩羅と、ピーサンスースーなる小形で甘い品種。椰子油の香気も好ましい前者の素材は、ピーサンラジャなる大形品種の未完熟なもの。またピーサンスースーは、ラテンアメリカでチキータと呼ぶ品種

---

としての利用価値を調べよ、の命令で、別々のコースで進む計画。3月19日に出発。

34　第二班 野田・田中・佐藤・榊原、第三班 泉靖一・増満増憲(190x-、通訳、南洋興発社員)・中山稲雄(1920?-、連絡員、海軍筆生)、水兵の小林・樋口、オゴタン(192x-、インドネシア人巡警)で構成。

35　ヘールフィンク湾最南端にある村。付近に大きな川は無いが海岸平野が開け、戦前から南洋興発の農場・植林地があった。

36　南北に長さ 1,200m、幅 5～600m の計画。帰国後の昭和十八年秋から翌年にかけて、調査報告のための会合が何度かあり、各班ごとの報告書を編集・印刷することになったが、完成したのは第六？班のみで、他は印刷所の被災で原稿・原図が焼失した。また、東大生の間に「ニューギニア研究会」が生まれていて、数回の会合が持たれた。次は、これらの会合の何れかで得た伝聞。「ナビレの滑走路が完成しかけた頃、米軍機の襲撃と強行着陸で奪取された。彼らは戦車のキャタピラの何倍もある鉄の巻物（これについては後記）を投下し、即座にそれを拡げて滑走路を補強、延長した」。

ちなみに予察先遣隊には3月9日、「打電方禁止」の軍命令が下った。「ナビレ飛行場　完成マデ我方ノ企図ヲ敵ニ知ラルルヲ恐ルルタメニシテ、之大本営ノ作戦ニ基クモノナリ、本基地ノ成ルヤ否ヤハ此方面作戦ニ決定的ナルモノナル由ナリ」と付言。

37　調査日記からの転載。「短波で故国の放送を聞く。南太平洋で敵駆逐艦2隻を撃沈、のニュースなり。又、米国サンフランシスコよりの日本語放送に聞き入る。デマ放送の前に、盛んにドイツに対する空襲の猛威を説き、日本に対しても同様の、より以上の空襲が加えられるであろう、と嘯き、最後に、ルーズベルトはこう言った、という。彼の迷言に曰く、「日本への道は幾通りもある」と。次に音楽の後、「未だ天皇陛下に忠良なる日本臣民に告げる。本日は、日本軍閥が愚かにも見込なき戦争を開始してより二千△百△△日目である。この戦争に於いて最近一週間に日本国民が払った犠牲は次のようである」と題して、ソロモン、ニューギニア etc.のデマ放送を行う。曰く、ビスマルク群島方面で二等巡洋艦3、駆逐艦7、輸送船12、飛行機180、兵員1.5万プラス5千。彼　の損害、飛行機4、と。全く噴飯物なり。その他、ラエに対する爆撃、独ソ戦 etc.あり。雑音多し。」

翌八日、大詔奉戴日には、「モスコー(モスクワ放送が)入る。しきりと、ドイツの野望と他国はその犠牲になりつゝあると宣伝しつゝあり、語調、激越なる日本語。日本のニュースあり。大本営発表八日午前五時。二月十六日より三月五日迄のソロモン・ビスマーク群島方面の戦果と損害。一つ、敵機124撃墜破、潜水艦4沈没。一つ、我が損害、駆逐艦2、輸送船5、飛行機7。これは昨夜の敵デマ放送の実相であろう。飛行機の損害に於いて、正に正反対である。此の輸送船団は、我々のパラオ滞留当時出港した船団には非ずやと心配なり。」（パラオの主島コロールで、炎熱下に完全装備、埠頭から南洋神社までの、約2粁の道を速歩行進させられている歩兵部隊を見た。落伍者多数。実戦を目前に、何と無意味な消耗か、と呆れ果てたものである。）

の仲間であったようです[38]。

苦力募集に行った人々が聞いた「燃える沼」の噂で、近くに「油兆地」があるらしい、との話。メタンだろうが、ともかく、と、野田・佐藤・中山の3名で調査に行くことになりました。残余は、三班の人はその基地へ、二班はマヌクワリへ帰還。一方、我々を「油兆地」近くまで運んでくれる筈の駐在部隊の大発が、二日間ノ修理ヲ要ス、とのことで、予定変更。付近のカンポン（村）巡りを試みました[39]。2 日経っても、大発は修理未了。やむなくプラウ（丸木舟、ミクロネシアでのカヌー）を借り上げて往復することとし、浮木が両側に付いた大形プラウを調達。カパラカンポン（村長）以下 5 人の漕手で乗り出たのですが、まじめに漕ぐのは村長ひとり。日本人にはインドネシア人巡警ほどの権威も無いらしく、他はまるで船遊び。或いは、部隊の担当主計が、賃金を先払いしていたのかも知れません。3 時間ほども経ち尻が痛くなった頃、岸のニッパ椰子の蔭から小舟が出て来ました。漕ぎ手は中年と白髪の女二人。老女は目的地カンポンキミの女村長だそうで、これも厳しく立派な顔立ちでした。ナビレに行く予定を、我々の先導に変更して三角州の小河口に導入。ここで上陸しましたが、さらに 1 時間ほど歩き回っても、石油は愚かメタン発生地も確認出来ず。復路は、パプアらも帰心。往路の半分にも満たない時間で帰着しました。隊員 3 人は、プラウの経験もしたし、と、これまた取り敢えずの満足。翌日、迎えのダイバーボート第三光洋丸に移り、寄港々々の3日掛かりで帰還。何のための先遣隊だったのか、まことに意義不明ながら、個人的には人類地理学的観察が収穫！でした。

## 第二班・プラフィ上流域調査

マヌクワリの本隊では、荷物梱包の作り直しで大童。ポーターの担送力 20Kg に合わせての、箱や袋の詰め替え作業です。そして19日には第四・第一班が相次いで出発。23 日、第五班出発。そして出遅れた第二班も、ようやく 25 日出発の運びになりました。

第一根拠地(一根）設定予定のアンダイ村アルファイまでは、はっきりした陸路があると云うのに、なぜか海路で。百余名の苦力を艀に乗せましたが、大半がアルファク族と呼ばれる山の民なので、波を怖がることひとしお。これを班員乗船のダイバーボートが牽引する仕組みで、局長の式辞で壮行式を行った桟橋を離れたと思ったら、僅か 1 時間でもう目的地の沖。荷物と苦力の積み降ろし分だけ、余計な手間と時間が掛かりました。ここで、海浜林を伐採して一根の建設。日本人用天幕 3 張、カナカ測夫＋巡警用のヤシの葉葺き家屋、それに倉庫もです。家や倉では、葉っぱ付きの枝が壁代わり。

地質・鉱物班と測量隊は、翌日から調査を兼ねて二根建設地を求めて密林の奥へ進む。やがて、ほぼ半日行程のプラフィ川の岸に、二根を設定しました。29 日に移動。上流・支流の沿岸など、付近を数日調査して、やはり半日行程ほど上流の砂礫段丘の縁に三根を設置したのが 15 日。割山と名付けた崩壊地の上流に設けた四根には23日に移動。もう4月半ばにもなりましたが、山麓の丘陵地帯を抜けられず、カナカやパプアの病人も増えています。そこで、作戦会議。班の全員が移動する根拠地方式では、期間内の使命完了は不可能。食糧も乏しくなった。此処から以南は、地鉱の四人を含む邦人 7 と護衛兵 2、巡警 1、苦力 28 名の小部隊で強行迅速調査を行い、格好だけは付けたい、の結論。そして 29 日、天長の佳節を機に出発。

その後は本格的な山道で、有るか無しかの踏分道にも急坂が連続。バロメーター高度計での測定ながら、高さは 1,000mを越え、樹林も着生植物の多い霧林に変わりました。それと共に、丘の尾根や頂に散居する人家が見えだし、シダ類やイネ科の雑草だらけの畑にも、彼らがジャグントンと呼ぶ玉蜀黍が植わっています。また、バビウータン（猪または野生化した豚）避けの柵の中には、ウビ、ケラディ(共にタロ[里芋]の仲間)とカボチャやタバコ。家のそばには、バナナや小粒トマトにトウガラシまで。焼畑の跡地らしい疎林もここかしこに見えます。やっと、マネキオン族の本拠に辿りついたのでした。

---

38 マレー語でゴリンは揚げ物、スースーは乳、ラジャは王様。

39 日記抄:「・・・トロンガレ=カンポン・・・ 娘達はパプアに珍しくまともな顔立ちにして、着物（和服）を着せ、色を少し白くしたら、日本にも多数に見られる女と成るだろう、と、皆の見解一致。（他村にはアリアン人的顔立ちの者もいて、混血の系統であるらしい）・・・パプア数人、珊瑚の新鮮なるを大切に持ち来るを見、何に用ふるやを問えば、所持の石灰粉を示す。即ちビンラウ、或種の植物樹皮と共に（ビンロウ[檳榔樹]の実とキンマ［胡椒科の植物］の葉）噛む生石灰粉の原料なり。」

真っ赤な唇になるが、一種清涼な気分が味わえる由で、この風習は、熱帯アジアからミクロネシアまで広く分布する。アンデス高地のインディオにも、コカの葉を石灰粉と共に噛んで清涼裡に天界に遊ぶ風習があり、石灰は塩湖の堆積物から得られていた。

さらに千五百米前後の峠を二つほど越えたマイボリ河畔で宿営。カナカ式の木枝小屋に草とグランドシートを敷き、屋根にはゴムシート。昼は 20°C未満で爽快ですが、夜は、吐く息が白く見えるほど冷えました。裸同然の苦力には応えるらしく、翌日は、病気と云うもの8名を帰らせ、残り 20 名の精鋭で出発。やはり起伏に乏しい二千米前後の尾根を通り、峠の上り下りで谷を横切りまたは源流を迂回して、ミニャンボー村着。付近には、畑と云うよりも農場が多く、オレンジ・パパイヤまでありました。オランダ時代の開拓地でしょう。新苦力13名を獲得し、カナカ式設営にも慣れました。この村の高度は千五百米程度。

5月1日。5時の気温 15.5°C、7時 40 分には 18°C。ここからも前日と同じ地形、同じ景観の中を進み、また千米前後まで下り、竹林の中をかなり広い濁流の大川を渡って、さらに数百米の急坂。やっと目的のチョイシー村。ここは尾根上の小起伏地で、小学校があり、壁は木の皮、屋根も椰子類の葉で葺いてありましたが、椅子には葦？のクッションが付いていました。ここでは村民が三色旗で迎えてくれたのですが、野田氏が三本に引き裂き、代わりに日章旗を御下賜。彼らは大喜びで、布片を三色とりどりの褌に転用したのでした。

村からさらに、南方の展望が利く峠に案内？され、「峠の茶屋」的な人家で昼食。食後、霧（下界から見れば雲）に妨げられながらも、遥か南の尾根を観察しました。東から、ヘールフィンク湾の船上から眺めたときも、山地の著しい平頂・定高性を訝しんだのでしたが、北側から見ても、やはり起伏の殆ど無い平尾根です。面白いことに、近くの尾根に一条の大きな滝が懸かっています。尾根筋を川が流れる筈もなく、かなり広い高原―たぶん、隆起準平原面が残っているのでしょう。結果的に第一・四班の報告書は目に出来ませんでしたが、アンギ湖の存在と成因も、そんなところにあるのでは、と思います。然しそこまでの間には、幾筋もの山波があり、二日や三日で到達出来るところでは無さそう。南進はここで打ち切り。この峠を泣別峠と命名することに合議一決。この間に高度計の針も、1930米から1915米に低下していました。

この日は、昨夜のカナカ小屋へ戻って泊まり、翌 2 日は、海抜千五百米前後のインダイ村を経ての帰り道。インダイでは村長の家を覗き、平面図を作成。その夜は、往路のマイボリ宿営地を利用。以後は一瀉千里の速さ。3 日に四根跡を通過し、4 日、三根では測量班ブレッソー君の墓に詣でました。私らの留守中に、悪性マラリアで病没、殉職したのでした。ここで、遺骨・病人と共にマヌクワリに赴いた田中医師を除く本隊と合流。休養と付近の補充調査その他に数日を過ごした後、二根跡の森林を横目に、本流筋をひたすら北上。12 日には、山も河岸段丘も遠くに去って著しく幅を増したプラフィの河原、と云うよりは、野生の蜜蜂が盛んに飛び交うススキ原に五根。翌日もその下流に六根。さらに支流（分流？）のメイスヴォキ川の岸に移って七根、そこからは、ネグリ=スンビラン（九匹の蛇）と呼ばれる迷路のような丘を越えて、タコの木(パンダヌス）茂る海辺の村、ブフォールに出る。この丘は、軟弱な泥岩・砂岩が開析された台地で、前身は恐らく、古プラフィ川のデルタ堆積物。マヌクワリ付近の珊瑚礁段丘に対比されるものでしょう。

15 日はブフォール海岸で最後のキャンプ。あとは明日の、本部からの迎えのボートを待つばかりです。砂浜にシートを敷き、カナカ測夫が採ってきた海亀の卵などを肴に、隊員は残りのアルコール全部を処理する酒宴。茹卵の殻がなぜ固くないの？などと管を巻く先生も現れる始末。パプア苦力にも、賃金に加えて残飯ならぬ残米の配給。輸送陣とは此処でお別れです。辛い仕事から解放され、ボーナスまで貰った彼らは、砂丘に輪を描いてライン、いやサークル=ダンスを披露。今まで 何処にしまってあったのか、頭には極楽鳥の羽根飾りまで付けて。唄いつつの踊りを、夜が更けるまで続けるのでした。

日本人隊員も、マヌクワリがすでに焼野原と化していた、とは、つゆ知らずに・・・。

（この項 おわり）

# 国立国会図書館所蔵の外邦図

鈴木純子（相模女子大・非）

## Ⅰ．はじめに

国立国会図書館が相当数の外邦図を所蔵していることは、所蔵地図目録の刊行等によって各方面に知られ、公開のコレクションということもあって、これまでにも広く利用されてきたが、その内容については、同館の地図コレクション全般の紹介のなかで、ある程度の言及がなされている（鈴木 1996；小澤 2000, etc.）にとどまり、まとまった報告はなされていない。他の資料群と同じく外邦図も、一括して受け入れたものではなく、地図室設置（1961年10月）以来、この新設コレクションを充実させようとする担当者および関係者の強い意欲のもとで進められた、寄贈、購入など、多岐にわたる経路で集められたものが中心で、これに戦前の帝国図書館以来蓄積されてきた資料が加わっている。外邦図も含むコレクションの複雑な形成史を、完全にたどることは難しいが、わかるかぎりでの経過とコレクションの特色について、概要を報告する。

## Ⅱ．国立国会図書館の近代地図コレクション

外邦図に先立ち、国立国会図書館の近代地図コレクションについて、簡単に紹介する。国立国会図書館が創設されたのは 1948 年である。戦後に国の中央図書館として新たに設立されたものであるが、全体として、そのコレクションは戦前の帝国図書館のコレクションを引き継いでいる。

この国立国会図書館に地図室が設置されたのは、1961 年 10 月、現在地（永田町）の第一期工事[1]が竣工し、赤坂離宮および上野からの移転が完了した時期である。1948 年の国立国会図書館法制定以来、この法のもとに、納本、国際交換などによって蓄積されてきた一枚ものの地図、約 25,000 枚をコレクションの基礎とし、これらの地図の整理など準備期間を経て、1963 年 5 月に地図専門の閲覧室―地図室―として公開され、現在に至っている。設置当初より、地図室の守備範囲は、明治以後の一枚もの地図の整理および提供となっており、現在はそれに住宅地図が加わっている。そのため、地図帳と近世以前の地図は、地図室の所管とはなっておらず、地図という観点からいえば少々使いづらい形になっている。当然のことながら、外邦図は近代に属するので、地図室が所管している。

所管資料は、継続的な納本、国際交換のほか、帝国図書館旧蔵資料（内交本[2]など）、参議院資料の移管、関係各機関（国土地理院・海洋情報部・外務省・統計局・郵政省・東京地学協会・AMS など）や、各氏（渡辺文庫[3]、浅井先生など）からの購入や寄贈、市中からの購入（国内未収図、外国地形図など）等により充実を重ねてきた。これらの中には多数の外邦図も含まれている（機関名は現在のもの）。

2003 年 3 月末現在の所蔵地図は、一枚もの地図 442,742 枚、住宅地図 41,334 冊である。

## Ⅲ．外邦図について

### (1) 所蔵図の概要

収集経路については後述するが、地域別の所蔵数は表 1 のとおりである。所蔵図中には同一図が重複しているものもあり、所蔵の実枚数はこれよりかなり多いが、この表の数字はそれらの重複図をほぼ除外した面数である。所蔵図はいずれも印刷図で、コピー図は含んでいない。また、海図はここにカウントされていない。印刷図 20,000 面余りの所蔵は、国内最大級のものといえるだろう（表 1）。

国立国会図書館の外邦図所蔵の範囲は、日本の旧統治地域を含む広義の外邦図作成地域全体にわたっているが、なお未収図も残っている。全体としては、東亜輿地図や樺太南部・千島・朝鮮半島・台湾・満州・ビルマ・インドネシア各島については比較的揃いがよく、未収部分は中国・インド・フィリピンなどで目につく。

明治期の略式測量からはじまり、昭和初期ごろまでに 5 万分 1 地形図を基本とする、ほぼ本土並みの地図

**表 1　国立国会図書館地図室所蔵外邦図枚数** [4)]
**（海図・複製図・重複図等は除く）**

| 地域 | | 枚数 |
|---|---|---|
| 台湾 | | 402 |
| 樺太 | | 344 |
| 朝鮮 | | 2936 |
| 満州・関東州 | | 4848 |
| 中国 | | 3777 |
| 東南アジア | 仏領インドシナ | 200 |
| | タイ | 76 |
| | ビルマ | 1120 |
| | インド・セイロン | 719 |
| | マレー | 173 |
| | フィリピン | 225 |
| | インドネシア | 2386 |
| 太平洋 | ミクロネシア | 139 |
| | メラネシア | 263 |
| | ポリネシア | 10 |
| | ハワイ諸島 | 60 |
| その他 | 北方諸島・千島 | 203 |
| | ソ連・モンゴル | 212 |
| | アラスカ地方 | 29 |
| | オーストラリア・ニュージーラ | 126 |
| | ヨーロッパ | 6 |
| 太平洋東亜小縮尺図 | | 2118 |
| | 合計 | 20372 |

の体系でカバーされた、台湾、朝鮮半島、樺太南部、千島列島のシリーズの所蔵は、下記のとおりで、全般によく揃っているが、千島列島の 5 万分 1 地形図は択捉島以南を欠き、この部分については、全域の揃う陸海編合図で補わねばならない。

**台湾**　**20 万分 1 仮製図、同帝国図、5 万分 1 地形図、2.5 万分 1 地形図、2 万分 1 地形図（臨時台湾土地調査局）**

**朝鮮半島**　**20 万分 1 図、5 万分 1 略図、5 万分 1 地形図、2.5 万分 1 地形図（主要地域）、1 万分 1 地形図（主要都市）**

**樺太南部**　**20 万分 1 図、国境付近 5 万分 1 図、5 万分 1 地形図、2.5 万分 1 地形図**

**千島列島**　**20 万分 1 輯製図、同帝国図、5 万分 1 地形図、5 万分 1 陸海編合図**

海図は外邦図としてはカウントしていないが、国立国会図書館の海図のコレクションは、明治初期のものから、改版分も含めて、非常に充実している。帝国図書館旧蔵分約 2,600 枚、1965 年年頭ごろの寄贈約 3,400 枚（詳細不明）（国立国会図書館　1965.3）などで、外邦図との関連では、同じ 1965 年に海洋情報部（当時水路部）から寄贈された、「機密海図」290 枚（国立国会図書館 1965.7）が重要である。おおむね昭和 10～19 年ごろの刊行になり、秘、軍極秘、軍機の赤刷のある海図である。多くは北方水域、南方水域のもので、その島嶼部や港湾に関しては、水路部の測量によるこれらの海図が、はじめての実測図ということになるケースが多いと見られ、その点からも注目される。後述する外務省旧蔵図中にも相当数の海図が含まれていた。

近年収蔵した資料中に中国の都市図 59 面がある。大部分は参謀本部ないし軍令部の作成で、縮尺は 2,500 分 1 から 2 万 5 千分 1、うち 38 面は 1 万分 1 以上で、1 万分 1 が最も多い。同一都市に別図がある場合もあり、都市数は約 50 都市である。既存の図と合わせると、およそ 100 面（うち 16 面は欠図を含む南京 1 万分 1 シリーズ）となるが、都市数はほとんど変わらない。国立国会図書館には以前から、北支那方面軍司令部による『保管地圖目録』（昭和 19 年 10 月 1 日）の断簡「市街圖、近傍圖一覧表」[5)] があり、これには陸地測量部や軍令部による 1 万分 1 前後の中国の都市地図 250 種以上が記載されていて、広範な都市図または都市近傍図が作成、保管されていたことが確認できる。しかし、所蔵図と

表 2　国立国会図書館所蔵外邦図刊行目録
『国立国会図書館所蔵地図目録』 各号（海図を含む）
＊収録地域名は目録の記載による

| 回次 | 部 | 収録地域 | 刊行年 |
|---|---|---|---|
| 1 | 台湾・朝鮮半島 | | 1966 |
| 2 | 北海道・樺太南部・千島列島 | | 1967 |
| 8 | 海図（上） | | 1976 |
| 9 | 海図（下） | | 1978 |
| 10 | 外国 I | 世界・アジア（全）・中国（本土・満州）・モンゴリア・シベリア/北樺太 | 1982 |
| 11 | 外国 II | 太平洋諸島・インドネシア・フィリピン・ベトナム・タイ・マラヤ・シンガポール・ビルマ | 1983 |
| 12 | 外国III | オーストラリア・インド・パキスタン・ネパール・スリランカ・中近東・アフリカ | 1984 |
| 17 | 外国Ⅷ | 中国　その2（5万分1地形図・衛星画像） | 1991 |

この一覧表所収図のデータが完全に一致するものはあまり多くない。データ採取の観点の違い、増刷の過程での改訂、全く別種の地図であるなどの理由が考えられるが、いずれにせよ、相当数の都市図が作られたことは確かである。コレクションを完全にすることは困難かもしれないが、なお収集につとめる必要がありそうである。

なお、外邦図の範疇ではないかもしれないが、帝国図書館以来のコレクション中には、朝鮮・台湾両総督府による両地域の 5 万分 1 地質図、台湾の油田、炭（煤）田地質図、合計約 100 面を所蔵している。貴重な地図資料として付記する。

（2）目録

外邦図は全て整理され、地図室で提供されているが、整理の年代が古いため、目録の形態は、カード、または冊子体の『国立国会図書館所蔵地図目録』各巻（表 2）等のみであり、書誌データの入力は今後の課題というのが現状である。また、この目録は、ほぼシリーズ地図のみを収録しており、単独刊行の都市図等は収録されていない。

朝鮮関係については、表 2 以外に『国立国会図書館所蔵朝鮮関係地図資料目録』（国立国会図書館専門資料部編　1993）がある。これは朝鮮関係のシリーズ地図について、表 2 の目録刊行後、約 25 年間分の増補・改訂を行っているほか、官・民の単独刊行図、地図室所管外の地図も含む、国立国会図書館所蔵の朝鮮関係地図資料全体の目録である。

なお、刊行目録の最も早いものとして、『中国本土地図目録―国立国会図書館及び東洋文庫所蔵資料』（西村　庚編　極東書店　1967）があり、東洋文庫所蔵分を収録する（東洋文庫の一部は国立国会図書館支部東洋文庫となっている）のが特色であるが、中国本土に関してもその後の増加は著しい。表 2 の目録で増補されてはいるが、その後の増加資料も多い。

カード、冊子とも目録には経緯度情報が入っていないが、地図室備付けの索引図（多くは手作業による、冊子体目録にも縮小版掲載）を併用することにより、所要の図に到達することができる。

（3）収集経路

地図資料収集の経路が多岐にわたっていることは、既述のとおりである。外邦図も例外ではない。地図室発足当初のコレクションの現況や収集の過程については、すでに提示したものも含めて、当時（1963～65 年頃）の国会図書館の出版物『国立国会図書館月報』『びぶろす』にいくつかの短報が見られる。

1963 年 3 月末現在の地図室所管地図（マップ）は和洋併せて 25,000 枚（副本共）（国立国会図書館　1963.7）、うち約 20,000 枚が和地図で、国土地理院、地質調査所、海洋情報部からの 1948 年以降の納本資料に、陸地測量部地形図旧版約 3,700 枚に及ぶ「渡辺文庫」を加えたもの、約 5,000 枚の洋地図は、U.S. Army Map Service による国際 100 万分 1 シリーズ、フランス、カナダ、ノルウェー、マラヤなどのものである。外邦図はここにはまだ含まれていない。

「地図室から―陸測版等東亜関係資料とその資料源」（国立国会図書館 1964.1）によれば、地図室はコレクションを充実させるため、上記の所管資料以外の資料群のうち、旧上野図書館から引継いだ「内交資料」、

「陸軍文庫旧蔵資料」[6]の調査を行い、この中から「陸測版地形図」約 1,000 枚、「農商務省地質調査所官製地質図」約 200 枚、「海軍水路部版海図類」約 1,500 枚、「洋地図」約 300 枚を、地図室の所管資料に加えた。移管された「陸測版地形図」の中には、国内の旧版地形図だけでなく、100 万分 1 仮製東亜および東亜輿地図、朝鮮 5 万分 1 地形図、満州 50 万分 1 図、同 10 万分 1 図、同 5 万分 1 地形図、合計 587 枚が含まれていた。この報告はさらに続けて、「旧軍人等有志各位」からの寄贈によっても、「満鮮支等東亜関係地図資料」収集の可能性があるとして、100 万分 1 東亜輿地図、満州国治安部版満州 50 万分 1 図、同 10 万分 1 図、関東庁関東州 10 万分 1 図、同 2 万 5 千分 1 地形図、陸測版朝鮮 5 万分 1 地形図（以上合計 279 枚）等、この時点までの主要な寄贈資料枚数を記載している。これらを合わせた 900 枚弱が、現在の地図室が所管・提供している外邦図の基礎ということになり、前項でふれた機密海図等もほぼ同時期の収蔵にかかるものである。

コレクション形成のためのスタッフの努力はその後も続けられており、有志からの大小さまざまの寄贈は断続的にあったと思われるが、全てを追跡するのは困難である。

外邦図のコレクションは、1965 年から 66 年にかけて急増する。外務省および国土地理院からの納入による。今回確認できた限りで、1965 年 11 月から 66 年 6 月までの約半年間に、国土地理院から 876 枚、外務省から 5,398 枚の外邦図が納入されている。当時、大量の一枚もの地図の受入記録は、200 枚を限度として一括した枚数カウントで行われており、各グループの地域、図種別の明細は追跡しきれないが、これらは通常、同種の図が一括され、代表図名とともにその枚数が記されているところから、内容について一定の類推は可能で、その範囲は、太平洋周域航空図、東亜輿地図等の小縮尺図シリーズから、東アジア、東南アジア、オセアニア全般にまで、広く及んでいる。なお、この時外務省からは、水路図 1790 枚、国内の地形図 322 枚も納入されている。

その後のまとまった収集資料としては、戦前の参議院図書館が所蔵していた朝鮮、台湾地形図約 200 枚、東京地学協会からの寄贈（1981 年、満州 5 万分 1、10 万分 1 地形図など）約 5,000 枚をあげることができる。特筆されるべき近年の寄贈資料は、浅井辰郎先生からのものである。2002 年 7 月から 2004 年 8 月までの間に、外邦図 1,052 枚、戦前の海図 664 枚（一部外国版海図を含む）、合計 1,716 枚が寄贈された。いずれも従来の所蔵図の欠図部分を補うことが確認された地図であり、コレクションの補強にとっての意義は大きい。

以上を合わせると約 13,000 枚余りである。1970 年代以降には、国内刊行の未収資料収集という形で、市中からの購入によるコレクションの充実も相当程度行われてきた。インドや、さきにふれた中国の都市図などは購入によっている。しかし、残る全てが購入による収集というわけでもない。膨大な図書館の受入資料の原簿から、地図資料、さらに、外邦図を拾い上げて検分する作業は容易ではなく、原簿による調査は受入の集中したおよそ半年前後の部分に限ってのみ行うことができた。その他の分も広く調査できれば、ほかにもある程度まとまった寄贈が見出せると思われる。特に、国土地理院からは、上記の 1,000 枚弱に止まらず、その後も何回か寄贈があったと見てよいだろう。今回の調査範囲をこえる時期の調査、戦後の混乱期のことで詳細がわからない陸軍文庫旧蔵資料の由来などは、今後、なお調査が必要である。

## IV．地図一覧図および図式（凡例）

国会図書館のコレクション中には、大量とはいえないが、外邦図の一覧図も含まれている。外邦図の一覧図については長岡（1993）に詳しく、これらが地図作成の記録資料として重要な意味を持つものであるにもかかわらず、地図そのものと違って、保存の対象となりにくく、伝存の少ないことが指摘されている。この報告には国土地理院所蔵の外邦図一覧図の詳細なリストが付けられている。しかし、長岡（2004）によれば、そのうちの一部には、その後、所在が不明になってしまったものが出ているという。長岡の指摘のように、国立国会図書館でも、地図一覧図は正規の資料として扱われて来なかったが、収集資料とともに納入されたたと思われる、冊子体および一枚ものの一覧図が参考資料として保管されている。冊子体のまとまったものに限って、いくつか例示する。

○「南方地区地図目録」（南方地区地図海図整備目録）（参謀本部第6課　昭和17年5月調　秘、表紙には□□□図班とあり）

地図種別ごとの面数、言語、号数などの表（手書き）と対応する索引図よりなる

インドネシア各縮尺、印度各縮尺の原語版一覧図（折込）を含む

○「支那地域兵要地図整備目録」（大本営陸軍部　昭和19年6月調製　表・裏表紙とも27枚　軍事極秘）

長岡（2004）表1で、現在地理院で所在確認できず、また、欠図（27枚中3枚？）ありとされているもの

○「外邦図精度一覧表（満州国之部）」（製図課第5班　昭和8年6月調査　11図　秘）

本邦製外邦10万分1（甲・乙・丙・丁）、露版図（甲・乙・丙）、支那製地図（甲・乙・丙・丁）それぞれ、索引図上に区域表示、別紙2枚（第2・3）

○「保管地図目録」（北支那方面軍司令部　昭和19年10月1日）

これは、一覧図ではなく一覧表である。第1～12表中、2～11表は脱落、表紙と表2枚のみの断簡、表紙とともに目次があり、民国製5万分1図、同10万分1図、中南支假製10万分1図、10万分1空中写真測量要図、兵要地誌図、航空図、南方図などよりなる。うち第12表は、さきに中国の都市図の部分で述べた「市街図及近傍図」リストで、おもに1:5000～1:10,000の市街図、一部1:25,000、1:50,000などの近傍図を列記する。

このほか、「支那方面十万分一圖一覧圖」「西部国境線関係要図」等の一枚ものを含む各種の一覧図があり、一枚ものにはコピー図も多い。コピー図は大多数国土地理院所蔵のものによっている。

なお、1957・58年頃に、当時の地理調査所と防衛庁防衛研究所が作成した外邦図の目録である『国外地図目録』（目録4巻　一覧図4巻揃）（長岡　2004）1セットも保有している。

図式については印刷図の所蔵はほとんどなく、大部分がコピーで、その原図は国土地理院所蔵のものと考えられるが、30種弱が数えられる。一覧図や凡例からは、座標の原点、周辺図とのデータの調製方法などが知られる場合もある。外邦図活用のための基礎資料として、一覧図、図式のいずれも、他機関所蔵のものも含めて、所在の確認、リスト化が必要と思われる。

## Ⅴ．今後の課題

本報告に関連しては、さきにもふれたとおり、収集の経過について未解明の部分をできる限り減らすこと、実態が必ずしも明らかでない陸軍文庫旧蔵資料についての調査が課題である。陸軍文庫については参謀本部文庫旧蔵資料との関連についても調査が必要と思われる。資料集として一覧図、図式の所在目録をまとめることも必要であろう。

あえて付け加えるなら、国立国会図書館の外邦図コレクション全体にとっての最大の課題は、『国立国会図書館所蔵地図目録』未収録図も含む目録情報の入力、検索システムの整備であるといえる。すでに整備されている各機関の目録との統合的な検索が究極の到達点というべきであろうが、前途の多難であることはもとより承知の上である。

### 注

**1）　現在の本館は第1期1961年竣工、第2期1978年竣工の、2期にわたる工事で完成した。第1期工事の完成とともに、赤坂離宮（現迎賓館）からの移転と、帝国図書館旧蔵資料を含む支部上野図書館の資料の大部分の移転が行われ、現在地での業務を開始した。なお、1986年には、書庫の一部を除く新館（その後書庫も完成）が落成した。**

**2）　内務省交付資料。検閲等の出版統制のため内務省に納められた出版物が、用済み後、帝国図書館に交付されていたもので、略して「内交本」と呼ばれていた。ただし、交付されたのは図書の一部のみで、雑誌はほとんど交付されなかったという。地図について言及されたことはないが、外邦図がまとまって交付された形跡はない。**

**3）　渡辺泰三氏（1912-1959）旧蔵コレクション。迅速2万分1図等、旧陸地測量部版地図約3,700面4,970枚。1950年購入。同氏は、日本橋区役所、宮内庁、陸地測量部/地理調査所を経て、早稲田大学図書館、地図、地誌類の整理、編纂にあたったという。（国立国会図書**

館 1963.7;同 1988, etc.)

4) 小澤知子氏(国立国会図書館収集部外国資料課主査)の資料提供による。

5) 本文IVのリスト参照

6) 戦後の混乱期に、上野の帝国図書館(上野の図書館は、1947 年 12 月までは帝国図書館、その後、国立図書館となり、1949 年 4 月から国立国会図書館支部上野図書館となる。現在は国際子ども図書館)に、一定部分が急遽搬入されたという。

## 文献


小澤知子 2000. 国立国会図書館地図室. 『地図情報』20(1): 4-6

国立国会図書館 1963.7. 国立国会図書館の地図室―付 渡辺文庫― 『びぶろす』14(7): 12-15

同上 1964.1. 陸測版東亜関係資料とその資料源. 『国立国会図書館月報』34: 21.

同上 1965.3. 海図資料着々整備される. 『国立国会図書館月報』48: 24-25

同上 1965.7. 旧海軍の機密海図について. 『国立国会図書館月報』52: 7

同上 1988. 『国立国会図書館百科』

鈴木純子 1995. 『地図資料概説―国立国会図書館所蔵資料を中心として―』国立国会図書館

長岡正利 1993. 陸地測量部外邦図作成の記録―陸地測量部・参謀本部外邦図一覧図― 『地図』31(4): 12-25

同上 2004. 外邦図作成に記録としての各種一覧図と、地理調査所における外邦図の扱い. 『外邦図研究ニュースレター』2: 17-23

# 『外邦測量沿革史草稿』第 18 巻～第 20 巻について

牛越（李）国昭

村上手帳、外邦測量の解析のために新たな資料はないものかと探っていたところ、今年 10 月下旬、NACSIS Webcat の検索サイトで、良く知られている復刻版『外邦測量沿革史草稿』とは別に、『外邦測量沿革史草稿』第 18 巻～第 20 巻というタイトルのものが示された。アジア経済研究所図書館所蔵であったので、11 月初め出向いて閲読したところ、『外邦測量沿革史草稿』第 12 中編（第 18 巻）、第 12 下編（第 19 巻）、第 13 前編（第 20 巻）の原本合本であり、1918～1919（大正 7、8）年の外邦測量について取り扱ったものであることがわかった。

3 巻とも表紙に極秘とあり、発行は参謀本部・北支那方面軍司令部である。

『外邦測量沿革史草稿』第 12 中編（第 18 巻）は、1941（昭和 16）年 7 月刊行で、副題に「大正七年度記事（臨時土地調査班支那駐屯軍測量班）」とある。本編の前半は、1918 年臨時外邦測図班の活動の記録で、測量対象地域は中国東北北部（「北満州」）・ロシア＝ソ連邦の国境地帯となっている。第一次世界大戦とそれに続いた 1917 年ロシア革命という情勢の中でシベリア地域にまで立ち入って測量しようと、かつての臨時測図部編成のような大規模なものではないが、本部班＋4 班 62 人の臨時外邦測図班が編制・派遣された。後半は外邦測量班＝中国（「支那」）派遣軍司令部特別測量班活動の記録で、1918（大正 7）年度外邦地形測量作業概要以下、5 組の編成表、また各組の報告書類が収録されている。測量地域は中国東北部・モンゴル地域であった。また雑録、既往ノ雑話があり、外邦測量班員が第 2 臨時測図部員として動員され、第 2 臨時測図部本部に到着したときの口羽第 2 測図部長と村上千代吉ら班員とのやりとりの様子が記録されている。

『外邦測量沿革史草稿』第 12 下編（第 19 巻）は、1941 年 12 月刊行で副題に「大正七年度記事（西伯利出兵臨時測図部ノ行動）」とある。本編は、シベリア出兵時の臨時測図部班のうち、第一臨時測図部の活動の記録が載録されている。シベリア地域での革命派と反革命派との闘争、列強各国のシベリア出兵という状況の中で、ソビエト革命派（「過激派」）と遭遇したりしながら測量を行った記録が収められている。

『外邦測量沿革史草稿』第 13 前編（第 20 巻）は、1942 年 1 月刊行で 副題に「大正七八年記事続編／臨時測図部ノ行動」とある。本編は、シベリア出兵時の第二臨時測図部の活動記録が載録されている。

冒頭、〝緒言〟として「東部西伯利ノ測地」があり、「……欧州の戦乱は惹ひて東洋に波及し大正 7 年遂に西伯利の出兵となり之に伴い第一第 2 臨時測図部編成出動に至る而して其測圖地域は東部西伯利北緯五十五度以南より漸次南に露満国境及北満州の一分東は『ハバロフスク』を基点として西は『イルクーツク』州に至る此以南『セシンガ』河の沿岸及国境『キャフタ』□□城に至る」と、シベリア出兵時臨時測図部活動の範囲が示されている。

これまで『外邦測量沿革史』は、甲午（日清）・日露戦争時と 1907～1908 年の臨時測図部活動の記録である『外邦測量沿革史草稿初編』の復刻版が刊行されている。その緒言に、1894～1912 年を第 1 期、大正年間を第 2 期、昭和年間を第 3 期としてまとめていくことが書かれているが、第 2 期以降のものは存在すること自体が知られていなかった。今回見つかった『外邦測量沿革史草稿』第 18 から第 20 巻は、1918～1919 年の 2 年間とはいえ、初めて大正期の外邦測量の詳しい資料ということ、特別測量班による秘密潜入測量＝盗測のまとまった資料、シベリア出兵時臨時測図部活動の資料という点で貴重である。また、シベリア出兵時の臨時測図部活動では、測量技術史的な側面でも大いに資料的価値があると思われる。各巻に村上千代吉の活動に関する記録があり、他方、1918～19 年の村上手帳との対照、特に第 2 測図部での活動は詳しい記述と対照することによって、この時期の村上手帳の解明にとっても大きな手がかりとなる資料である。

この『外邦測量沿革史草稿』第 18 巻から第 20 巻というタイトルの付けられかたからすると、復刻『外邦測量沿

革史草稿初編』各編は、それぞれ第 1 巻から第 6 巻に当たり、また冒頭の緒言に 1939（昭和 14）年とあることから、少なくとも 7 巻から 17 巻までが 1936 年から 1941 年までに刊行されているのではないかと言うこともできる。

アジア経済研究所所蔵のものには、各巻表紙に岡村の印がある。もともとの持ち主のもの思われるが、それは陸軍嘱託・岡村彦太郎であろう。既刊復刻版『外邦測量沿革史草稿』初編でも、同第 18 巻～第 20 巻でも編纂者は明かされていないが、『外邦測量の沿革に関する座談会』（1936 年）のなかで『外邦測量沿革史』が陸軍嘱託・岡村彦太郎によって編纂されるとあるので、『外邦測量沿革史』の編纂者は岡村彦太郎であろうと推察される。

各巻の目次は次の通りである。

**『外邦測量沿革史草稿』第 12 中編（第 18 巻）**

一、参謀本部参密第三〇六號第一／臨時外邦測圖ニ関スル件通牒
二、臨時土地調査班作業計劃概要
三、附表
四、支庶第二八號／臨時測圖班ニ関スル通牒寫送附ノ件
五、参謀本部参訓第一九號　参謀総長／臨時測圖班ニ関スル件訓令
六、井上少佐ニ與フル命令／矢野目測量部長
七、臨時班ノ行動
八、各分班作業實施ノ概況　第一分班ノ概況
九、組員ノ行動
一〇、第二分班ノ概況
一一、第三分班ノ概況
一二、業務實施景況報告　河野斯良
一三、蒙古人及「支那」人ノ状況
一四、作業報告
一五、第四分班ノ行動
一六、第一二三分班ノ行動
一七、山本榮蔵外二名行方不明ノ件報告
一八、山崎大尉脇田測量手坂本通譯ノ遭難顛末
一九、参謀本部参密第五〇〇號第一
二〇、大正七年度外邦地形測量作業概要／（支那駐屯軍司令部附測量班員ノ部）
二一、附表
二二、測圖計画及實施ノ経過　幹線測量
二三、表面測圖計画及實施経過　木欄表面測圖
二四、肇東縣地方作業
二五、塔爾哈站地方作業
二六、泰来縣地方作業
二七、　東縣地方作業
二八、測地一般地形ノ状態　幹線測量地帯
二九、第一組作業實施経過
三〇、第二組作業實施経過
三一、第三組作業實施経過
三二、第四組作業實施経過
三三、第五組作業實施経過
三四、測地一般踏査ノ現状
三五、作業一般ノ成果
三六、雑録
三七、既往ノ雑話

**『外邦測量沿革史草稿』第 12 下編（第 19 巻）**

謹告
一、第一二師團司令部参發第一八號
二、第一臨時測圖部第一期第一回作業計画
三、第一臨時測図部動員編成
四、八月二十七日井上大尉ヨリ坪井少佐宛書翰
五、第一臨時測図部長松本少佐ノ書翰
六、九月四日松本少佐ノ書翰及第三信
七、陸地測量部事務官ヨリ松本少佐ヘノ書翰
八、松本少佐ノ第四信
九、第五松本少佐ノ書翰
一〇、電報　総務部長宛由井参謀長
一一、第一臨測發第五九號／鹵獲圖々送附ノ件通牒
一二、第一臨時測圖部長宛陸地測量部長／鹵獲地圖ノ精度調査ノ件照會
一三、第六松本少佐ノ書翰
一四、第七松本少佐ノ書翰
一五、経緯度班ノ編成
一六, 第一臨時測図部ニ寫眞班ヲ増加スル件上申
一七、寫眞班編成上ニ関スル要件
一八、第一二師團測圖作業実施報告
一九、過激派遭遇事件
二〇、松本少佐ノ書翰

二一、慰問品ニ對スル稲田大尉ノ禮状
二二、印刷班ヲ編成シ第一二師團ニ配属相成度件上申
二三、矢野目測量部長ヘ井上大尉ヨリ現状報告ノ書翰
二四、第一臨時測図部履歴書
二五、「オリガ」湾地形調査録／陸地測量手谷田部庸之助
二六、地理調査録同　伊藤庄太郎
二七、同　大澤　健作
同　大西　壽吉
二八、同　神保　秀六
同　熊谷　健二
二九、第一臨時測図部第四班長　田中大尉提出地形調査録
三〇、附録　續既往雑話

**『外邦測量沿革史草稿』第 13 前編（第 20 巻）**

東部西伯利ノ測地
一、第一臨時測圖部第二期第一回作業計劃
二、第二期第一回ニ於ケル職員編成表
三、第一臨時測圖部経緯度測量實施要領第二期作業報告
四、経緯度班第二期作業部署表
五、参考　測量器械ニ就テノ實況其他／経緯度班長井澤大尉
六、防寒被服
七、作業報告　㈱経緯度第一區隊㈱
八、作業要領並ニ経過
九、所見　平木測量師
一〇、擔任地區作業報告　第一區隊長測量師
一一、作業報告　第二區隊　松尾測量師
一二、同　同　梅本測量師
一三、臨時第一測圖部測圖作業實施報告
一四、同　作業着表
一五、第二臨時測圖部動員及編成
一六、第二臨時測図部ノ行動
一七、第二臨時測図部作業計劃書
一八、第二臨時測図部測圖實施報告
一九、第二臨時測図部職員表
二〇、経緯度班ノ行動
二一、第二章　所感　　其一編成
二二、経度測量
二三、帰心法
二四、外邦測量ニ伴フ各種ノ調査
二五、　右ニ伴フ雑件
二六、貝加爾湖南岸地區地形偵察抜粋／歩兵第四十　附陸軍歩兵中尉森長
二七、「インゴダ」河谷　況偵察／第四地形班長陸軍歩兵大尉笹井泰造
二八、軍用輸送送中ノ事故／㈱第二臨時測図部㈱
附録
二九、西伯利ノ地帯
三〇、後貝加爾州ノ概況